
WyvernCourier

市太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WyvernCourier

【Nコード】

N9924X

【作者名】

市太郎

【あらすじ】

特技はトラウマになるほど動物から懐かれます。そんな主人公が落ちた穴の先は異世界の空だった。落下していく主人公を助けたのは巨大なワイバーン。主人公の特技にてストーカーと化したワイバーンと共に、主人公は新たな世界で東奔西走する 予定。

01 私、モデるんです。(前書き)

穀史二五二氏作の『トンドモわいばーん』からネタをお借りしております。

01 私、モテるんです。

生まれ落ちたその日から私はモテた。とにかく、モテた。老若男女問わずだ。

とは言っても乳幼児期の記憶は定かではないので、家族から聞いた話。

家族から幾度か話を聞いてはいたけれど、小学生へ上がる頃にはさすがに自覚した。

私はモテるのだと。

何かそういうフェロモンが出ているのではなからうか、なんて疑問を通り越して確実に出ているとしかいいようがない。

目の合う距離まで近づくと、相手は必ずストーカーと化す。

自覚が足りなかった頃はマジで怖かった。

自分より小さければまだ平気だったが、小学一年生になりたての女子が成犬の雌セントバーナードにのし掛かられペロペロではなくベロンベロンされる恐怖を想像できるだろうか。

口臭は言わずもがな、セントバーナードに滴るほど涎を塗りたくられ、泣きながら粗相したのは良い思い出である。

私のファーストキスは同性の異種族に奪われ、後にも先にも彼女以上に熱烈なキスをしてくれる同族の異性はいない。

そう、私はモテる。

人間以外に、という注釈つきで。

小学生時代はとにかく動物が恐ろしかった。

起床し窓を開ければ雀から鳩から烏と近場に住む野鳥がやってくる。

白雪姫のようにアハハウフフならまだ可愛い。勢いよく飛来してくる恐ろしさは某パニツク映画を凌ぐものがあった。

たまたま野良猫生息地帯を通れば、どこの笛吹ですかというくら

い野良猫を従えて泣きながら帰宅をし、大型犬を飼う家の前を通れば恐るべき跳躍力によって塀を飛び越えてのし掛かられ、遠足で動物園へ行けば私はスターさながらに檻の中から熱視線を向けられるのである。

中学、高校と歳を経て、さすがに自分の異常性を認めた私は動物達と上手く付き合うために色々と実験を重ねた。

結果、視線が重なる距離、もしくは視線が重なることによって彼らは私のストーカーと化すことが分かった。

目がばつちりと合う距離で、互いに認識しあうと彼らは種別問わず某CMのキャッチコピーのようにまっしぐらでやってくる。

視線の合う距離でもついては来るのだが、視線が合わないとは彼らは諦めて後についてこない事を学んだ。

この発見は私にとってかなり大きく、高校以降の被害は格段に減ったのである。

また、犬猫でしか分からないのだが、生まれたてで視力が乏しいと私が認識できないようなのでストーカーと化すことはなかった。

おそらく、鳥類も同様と思われる。

ちなみに、この訳の分からないフェロモンは残念ながら人間には効かないようである。

実績は二十三年を向かえ未だ更新中である。非常に残念だ。

他、昆虫類にも効かない。

全ての動物と接触を果たした訳ではないので確かとは言い難いが、恐らく人間以外のほ乳類、鳥類、魚類に効果があると思われる。

そして。

そして、恐竜の類にも効果があるようだ。

ただいまワタクシ、立科たてしな薫かあるは声よ枯れるとばかりに悲鳴を上げて高い空より地上へ落下しつつ、寄って集ってきたプテラノドンもど

きの団体から熱烈にまとわりつかれております。
誰か助けてーっ！！

02 私、迷子になったんです。

その日、私は直属の上司に頼まれて役所へ出かけることになった。それを聞きつけた隣のエリアにいる営業部長がついでにと用事を頼んできたのが事の発端だと思う。

昼食を済ませて午後一でまずは役所へと向かい、用を済ませた私は再び電車に乗って会社のある駅を通り過ぎた。

目的地は都内ではあるが都心から外れたローカルな駅で、改札を抜けた先にあるメイン通りはバスがぎりぎり擦れ違えるような細い通りだった。

十分ほどその通りを歩き、とある細い道を左に入っただけでは良かったのだが、至るところに『この先車両の通行できません』の立て看板が目立つ辺りで私は焦りだした。

抜けられると思って進んだ先は駐車場となっている私有地であったり、自転車がやっと擦れ違えるような細道が五差路であったりと右往左往しているうちにすっかりと迷子になってしまったのである。

目的地は取引先の会社で用事自体は書類を預かってくれれば良いだけという簡単な物であったが、道に迷ってしまい現在地さえも分からないという状況。

とにかく一旦メインの通りへ戻ろうと、携帯でアクセスした地図を見ながら足早に進む。

昨今、地下鉄のポスターでは『ながら歩きを止めよう』と喚起していたりするが、正直それどころではない。寧ろ構っていられるかという心境だった。

ながら歩きをしていなければこんな事にはならなかったかもしれないのにと、悔いても悔やみきれないが後の祭りである。

通り過ぎざまに電信柱の番地を確かめ、そして携帯の地図に目を落とした瞬間、私の踏み出した左足は地面に触れなかった。

よく言えば昔ながらの情緒ある町並み、悪く言えば整備が行き届

いていない裏道である。

窪みがあったのかと焦ったが、上体は傾げど左足は一向に地面へ到着しない。

段差どころかよもや蓋の開いたマンホールにでも落ちたのか。そう思わざるを得ない。

転びそうになる誰しもがするように、衝撃を少しでも緩和しようと咄嗟に伸ばした手が宙を搔く。

手に持っていた携帯が放物線を描いて道路に転がり滑るさまを見たのが最後、穴に落ちた私の視界は闇に覆われたのである。

自分の腕も認識できないほどの真っ暗な闇の中、次第に落ちる速度が増していくのが分かる。

あらん限りの悲鳴を上げ続け、息が切れだした頃ようやく違和感に気付いた。

いくらなんでも落ち過ぎやしないかと。マンホールに落ちたとしてもいい加減に底へ衝突してて良いのではなからうか。

肩に掛けた鞆を抱き込み、膝を折り曲げて正に身を護ろうと体を丸めたまま、こんな状況の中で周りを見る余裕を次第に取り戻す。

実際、真っ暗なので周りはおるか自分の腕も見えない状況ではあるのだが。

そう、落下している重力は感じるにもかかわらず風を感じないのである。

まるで、超高層ビルの最上階からエレベーターで一気に一階まで下りていくような感覚といえいいのだろうか。

落下し続けてどれほどの時間が過ぎたのか、まだ数分といったところだと思っただが悲鳴を上げるのにも疲れた頃、ふと気付けば暗闇に目が慣れた時のように薄ぼんやりと自分の身体が見えるようになってきた。

目が慣れたのではなく、暗闇が薄れてきたようである。

上と思しき方を見上げても落ちたはずの穴は見えず、下と思しき方を見ても出口は一向に見える気配がない。

内心、焦りと不安で一杯なのだが、いかんせん何も手立てが無い。唯一のよすがである鞆をひたすら抱き込んだまま落下に身を任せると、やはり辺りの明るさが増しているように思えてきた。

自分の身体を見る事もできないほど真っ暗であったのに、今では限りなく黒に近いグレーに思える。

時間が経つにつれ、やはり気のせいではなく徐々に徐々にと辺りは明るくなり、今では真っ白な世界になっている。

真っ白というか、濃霧の中にいるような感覚である。

ドライアイスの煙の中を進むように、落下する身体に靄がまとわりつき流れていく。

一体自分の身に何が起きたのか、どこへ向かおうとしているのか、答えの出ない幾度目かの自問を繰り返したとき、とつじよ世界は変わった。

ポフンツと効果音でもつきそうな勢いで真っ白い濃霧の世界から吐き出されたそこは、澄み渡った清々しいほどのスカイブルー。

お尻と背中を下に落下していたため、靄の名残が飛行機雲のように薄くたなびいているのが見えた。

それまで感じることもなかった風の音、視線を転じれば遙か遠くには日の光を反射させる海、開けた土地に小さく見える固まりは建物の影だろうか、大小と大きさは様々だが点在している茶色いスペースは農作地かもしれない。

町と思えるそれらはかなり遠くに見える。

強い風圧の中、ぎこちなく視線を落下方向へ向けてみると、ここぼこと隆起している茶色にまばらな緑　　山だ。と認識した途端、顔が引き攣った。

漏れなくミンチ！

ちよっ！ まっ！ やっ！ どっ！ なっ！　　パニくって言葉にならない叫びが頭の中で繰り返される。

いつそのこと気絶できたらどれほど良かったか。

迫りくる死へのカウントダウンなんて数えたくはない。

助けてくれるものなら悪魔でも良いから縋り付きたいといったそんな時、『ギャー？』とやけに間延びした声が直ぐ傍から聞こえたのである。

03 私、玩具じゃないんです。

ギョツとして声の方を見てみれば、数頭のプテラノドンもどきが悠々と風に乗りながらというか、一緒に落ちながら不思議そうな眼差しで私を見ていた。

プテラノドンのように嘴は長くない。寧ろ短い。馬程度の鼻面と
いうのだろうか。

猫や爬虫類のような縦長の瞳孔に琥珀色の虹彩、目の下まで裂けた口から覗く牙は私の腿より太そうだ。

頭の上には二本の角、えらの辺りにも角のような棘のような硬そうな突起、そのボディはこれまた硬くて丈夫そうな鱗に覆われている。

こんな顔をした動物、いや恐竜……でもなく生き物を見たことがある。映画とか、本の挿絵とか、つまりファンタジーなドラゴンによく似た顔をしているのだ。

私に並ぼうと飛ばたきを止めている翼膜はまさに映画で観るようなドラゴンのようであり、前足はないが後ろ足の太腿はさぞかし脚力が凄いのだろうと思わせる逞しさ。

そして尻尾の末端には逆向きの棘が付いていて、先端にはハートを逆さにしたというか槍の先を付けたような形をし、殴られたら肉を軽く抉られそうである。

尻尾の棘が生えている辺りから個体によってだが、黒ずんだ緑や紫の模様が入っているいかにも毒々しい。

以前やっていたファンタジーゲームで見たことあるような気がする。

ドラゴンとはまた違う、ワイバーンというタイプそのものだ。

慌てて視線を転じれば、計六頭のプテラノドン改めワイバーンが付き合いよく落下している。

個体のボディは茶、蒼、緑、白、銅、^{あか}黒と大変カラフルである。

その内の一頭、黒いのと至近距離でばっちり視線が重なる。あ、何か目が爛々としてきた。

そして、黒とは反対側にいた蒼いのがパカッと口を開けて素晴らしい牙を披露してくれた。

私も迷わずに口を開けた。

「ぎゃーーーーーーっ！！！」

一口ではさすがに無理であろうが、二口、三口なら余裕でいけそうな大きな口を間近で開けられれば誰もが叫ばずにはいられないだろう。

私の叫び声に黒のワイバーンがパチクリと瞬き仲間に視線を向けた。

目配せのようなその仕草はやけに人間臭く感じたが、地面に叩きつけらるかワイバーンに噛み殺されるかという二者択一を迫られている私には気に留める余裕もない。

叫び続ける私をよそに、ワイバーン達も何やら騒ぎ始めた。

『ギャーーーーー？』

『ギャアー？』

『ギユアー！』

刻一刻と地面が近づくこの状況で、けっして余裕があるわけではないのだが、彼らの鳴き声にアフレコを当てるとするならば。

『聞いた？ ギャーだって、ギャー。可愛くね？ ギャーッ！』

『聞いた聞いた。ギャー、良いな。ギャー！』

『イエーイ！ ギャーーーーーッ！ 俺も今度からギャー使うっ！』

こんな具合に直ぐ傍でテンション高く鳴き合うものだから喧しいことこの上ない。

思わず両耳を塞いでいると、傍らの黒いワイバーンが急降下を始めた。

何ことかと目で追えば、かなり距離を取ったあとに今度は私に向かって上昇してきたのである。

「っ……ひいつ！」

とうとう喰われるのかときつく目を閉じたが、訪れたのは痛みではなく軽い衝撃と重力に逆らう浮遊感。

「……？ あ、あれ？」

恐る恐る目を開けると、何と黒いワイバーンの背に乗っているではないか。

もしかして、このファンタジーな生き物にも私のフェロモンは有効なのか！ 視線を巡らせ他の五頭の様子も見てみたが、喰ってやるうという意気込みは感じられない。

感じられないが、うっかり全部とバツチリ目が合ってしまった。

中でも一番大きいのが黒のワイバーンであったが、どのワイバーンの背も私が余裕で大の字になれる大きさである。

しかし、鞍も手綱もなく、ツルツルとした鱗ではしがみつきようもない私は非常に不安定な状況であり、彼らがそんな私の心情を酌めるはずもなく、景色は私という争奪戦が始まったのである。

あ、止めて。と思う間も無く蒼いのが黒いのに体当たりをし、宙へ投げ出された私を器用に白がキャッチ しかけたと思いきや茶色いのが白の顎を蹴り上げる。白に掴まえてもらえず落下する私を待ち構えている緑がゴールと思わせて、銅が羽ばたいた翼膜でトスをする。

空中でバレーボールをするワイバーン達とボールになった私。

トスをやめーてー！ 誰か止めてー！ 私のために争わないでー！ というか私を玩具にしないでー！

彼らのおかげで私はミンチとならず、大地に下り立つことができた。

地面へ下ろしてもらった途端に膝が崩れ、盛大にかましてしまったことは後に良い思い出となるだろう。

04 私、悲観したいんです。

無事、というには語弊はあるが、命を脅かされることなく大地に立ち、余裕を取り戻した私は改めて周りを見渡し絶望した。

なぜにワイバーン達があの場合にいたのかといえば、私が落ちた辺りはどうやらワイバーンの生息地の上空だったらしく、取り囲んでいるワイバーン達他にもカラフルなワイバーンが空を飛んでいた。自前の巣穴に出入りしていたりするのが見えた。

小さい個体でもそのボディの幅は二メートルはありそうだし、羽を広げれば軽く見積もっても六メートルくらいはいきそうである。

全長に関しては、地に佇んでいても私の倍はあるから、ワイトルウィウスの人体図のように考えれば地面と接触する辺りを臍として頭のとっぺんまで三メートル越え、その倍で尻尾の途中までは七、八メートル、プラス尻尾の先まで入れてザッと十メートル。

ワイバーン相手に人体図が通用するとは思わないが、だいたい物の大きさを目測する基本にしているだけなので本当にアバウトな大きさである。

コンクリビルの一階は凡そ三メートル強、中層ならば三・五メートルといったところだから、小さい個体でも尻尾までの長さで三階ほどの高さというわけだ。

争奪戦ウィナーとなった黒は他の個体よりも一回り大きいので適当に十五メートルくらいと予想しておく。

ビル四階建てってところだ。うむ、実に大きい。

そんな巨体な連中の生息地なので、山一つに付き六頭前後という住宅事情らしい。

山の中腹以上が譲れない条件らしく、垣間見えた麓に巢は見あたらなかった。

山の高さにもよるがだいたい二層タイプで、下層には山の東西南

北に穴を掘って四頭、上の層には二頭から三頭、更に高さのある山なら頂上付近に一頭が巣穴を作って生息しているようである。

黒のワイバーンは連なる山の中でも特に高い部分に巣穴を設けているようで、雲が下に見えた。

つまり、酸素が薄いのではないかと思われる。高山病の症例を火急求む次第だ。私は自慢ではないが無知なのだ。

迫り出した崖が玄関に当たらしく、下り立つ、飛び立つのはこの場所らしい。

のっしのっしと進んだ先は巣穴らしき洞窟となっており、大きな窪みには岩やら倒木なんか敷き詰められている。

ふと、ペンギンの巣を思い出した。拾ってきた石を一生懸命敷き詰めて卵を暖める場所だ。

あれを十数メートルにまで拡大したような雰囲気である。

ペンギンが集める小石といった可愛らしさはない。大きい岩がゴロゴロ置かれている。

倒木もワイバーンのサイズからすれば小枝感覚なのだろうが、立派な木を薙ぎ倒して運んだ感が否めない。

折れた箇所が鋭利となっていて、危ないことこの上ないのだ。

黒のワイバーンはワツサワツサと羽ばたいて、呆然としていた私の意識を惹いてくる。

はつきり言ってギャーギャーと鳴くワイバーン語などを私が理解できるはずもないのだが、軽く胸を張って鼻息一つ吐き出すその表情は自慢そつである。

ドヤ顔しているワイバーンのアプローチを私流にアレンジして解釈してみた。

意識すれば『見て見て！ 超高層マウンテンビューなの！ パノラマ、凄いでしょ？ 高級物件なの！ 俺、強いから。これくらいのもうなんて当然なんだぜ？ 巣も見て見て？ 兵庫県産の本御影に屋久島の杉を取り入れてみたの、オシヤレでしょ？』といった具合だろうか。

実は、動物相手の垂れ流しフェロモンとは別に、動物の意向を汲み取れるという特技を合わせ持っていたりする。

ペットを飼っている飼い主ならば、食事や散歩、遊んでという催促はそこはかとなく感じ取れるだろう。

会話はさすがの私とてできないが、動物からのそういつたアプローチを普通の人よりも正確に読みとれるというものだ。

以前、バウリンガルなる玩具が流行ったりもしたが、高性能なバウリンガルが内蔵されているのだと思うことにしている。

この特技を活かして動物病院にでも勤めようかとも思ったりしたが、私と出会ってしまった動物達は必ず訪れる別れに泣き叫ぶ。

誇張一切無く、泣き叫ぶ。

今生の別れのように、実際二度と会う機会は無いのだが、生木を裂かれるかのような叫びは、後ろめたいことは何一つ無いというのに罪悪感を募らせる。

抱き上げる飼い主に四本の脚を目一杯突っ張らせ、必死に顔を背けて叫ぶペットの姿を見て、飼い主さんには本当に申し訳なく罪悪感に苛まされたものだ。

とてもではないが、動物と係わる仕事は無理である。

動物に懷かれやすいの、などと人に自慢出来る領域を越えている私であるが、さすがに想像上の生き物は手に余る。

穴に落ちたときから可笑しいオカシイと思っていた。

現実から目を背け、夢なのだ、白昼夢なのだと思いついてみたくて無駄であった。

命を脅かされる危機がひとまず過ぎ去ったことで緊張が緩んだのか、今度はアイデンティティの喪失で自分を見失いそうになった。

現代社会でこれほど大きくカラフルな鳥類なんて聞いたことなどない。どう見ても鳥類とは思えないが。

日本ではない。仮に地球のどこかだとしても、もしかしたら現代でない過去の、白亜紀かもしれない。

得意げに見せられた岩と大木の間に見える薄汚れた白い棒は骨だ

ろつか。

素早い動きで岩陰を走るのは何の虫だろうか。

文明の欠片も無いこの場所でどうしろというのだ。

冷静に考えれば考えるほど気が触れそうになる。

思わず腹の底から叫んでいた。

「やめっ！ やめてっ！ アンタ、今そこでトイレしたでしょ！

用済んで舐めてたでしょうがっ！ その舌で舐めないでっ！ 舐めんなー！

顔を寄せて舐めようとしてくるワイバーンの鼻先を両手だけでは足りず、片足をもあげて必死に舌を出させまいと阻止する。

人が真剣に苦悩しているにもかかわらず、茂みの向こうで恍惚な顔をしていたのが横目に見えてた。

その長い首が下半身に曲げられてたのも見えた。

茂みで見えなかつたとは言え、盛大な水音とその後の行動で何をしていたのかくらいは分かる。

舐めたいのっ！ 舐められて溜まるかっ！ の攻防で、まずは私が辛くも一勝を納めた。

マジで危なかった。

その後、落ち込みそうになるたびにワイバーンが慰めようとしてか舌をのばしてくるため、幸か不幸か私は自分の不孝に浸るところではなく、本当に幸か不幸なのか……自分を見失うことはなかった。

とは言え、絶望は去ったとは言い難く、人類未踏と思えるような山の頂上においては、遅かれ早かれ死んでしまう。

ライターも無い状況で火を興す術も知らず、鞆にあるのはペットボトル一本の水、携帯栄養食、飴一袋と訪ねる予定であったお客様への菓子折りだけである。

生菓子でないのは幸いだが、一週間ももたない。

何とかして文明のある場所へ行かないと そういえば、空
から落ちていた時、建物というか集落よりももう少し大きい規模、
町のようなものが見えた気がする。

遠くだったからはずきりは見えなかったが、家を建てる技術があ
るならそれなりに文明も発達していると思っただろうか。

この際、高床式な建築技術でも構わない。
衣食住の確保をしなければのたれ死んでしまう。

05 私、案外肝が据わっているようです。

動物の多くが伴侶となる相手に何かしらアプローチをする。物を贈ったり、求愛ダンスを披露してみたりと様々であるが、どこも知れぬこの世界でも求愛活動の基本は同じようである。

黒は好条件らしい住宅を得意げに見せてくれ、銅あがはのた打ち回る首無しアナコンダっぽい生き物を持ってきてくれた。獲れたて新鮮フレッシュなものだから、長い尾が未だに激しくくねっていて非常に危険である。誉めて誉めてとばかりに啜えたまま近寄らないで頂きたい。察してくれ。もがくアナコンダの尾で黒が下顎にアッパーカットを喰らって少々不機嫌である。

白いのは熊っぽいのを持ってきてくれた。身体に綺麗な穴がたくさんついているのだが、その尻尾の棘々で仕留めたのだろうか。フルスイングでもしたのだろうか。開いた穴の辺りがドドメ色に変色しているのだが、問題なく喰えるのだろうか。いや、喰う気はないのだが……いきなり解体ショーが始まった。鋭利な爪で熊の腹を掻き、取り出した内臓を差し出してくる。喰えというのか。熊の胆は確かに高級品だがそれは喰えるのか？ フレッシュな赤が徐々にどす黒くなっていくのは毒なのではなからうか。

彼らワイバーンは巨体なので、仕留める獲物もとうぜんとばかりに大型動物ばかりである。大型であろうと小型であろうと、ナイフも火ないこの状況では頂くわけにもいかないので気持ちだけ頂くといいことで丁重にお断りをする。

他、蒼と茶は岩を持ってきてくれた。岩の中に色のついた石が埋まっている。宝石か何かの原石と思われる。緑は歓迎の舞を披露してくれた。

雌雄の区別は付かないのだが、プロポーズというより大好きアピールと思われる。

君達の気持ちは重々に理解したので自重して頂きたい。

しかし、かなり陽も落ちてきて辺りが夕焼け色に染まってきた。

私の手よりも大きい虫が徘徊する場所で夜を過ごすのは正直引ける。いや、過ぎしたくない。かといって、山の八合目、九合目辺りに位置するこの場所から徒歩で麓へ下りる気にもならない。頂上とは言っても洞を掘る関係上、この辺りが巢としては最高地なのだろうが、人間である私には関係のないことである。駄目元で彼らへ交渉を試みた。

翼を持つ生き物なので鳥目かどうか気がかかる。肉食である猛禽類、梟は夜に活動していることもあり、少なくとも恐竜に近いと思える彼らは鳥類とも思えないし、恐竜の類に鳥目があるのか分からないが大丈夫と思いたいところである。

体の大きさから黒いワイバーンがリーダー格と思われるので、試しに話しかけてみた。暗い夜でも飛ぶことは可能であるか？ と。

黒のワイバーンはワツサと緩く羽を広げて傍らに居た仲間に向けて目を見た。

その仕草たるや、実に人間臭く私の琴線に触れる。

「おい、聞いたかよジョージ。キティちゃんが、俺らに夜でも飛べるかってさっ！ 笑っちゃうよな！ 俺らを誰だと思ってるんだよなあ？ ワイバーン様だぜ？ ワイバーン様！」

「まったくだぜ！ 俺らワイバーン様に不可能なんて無いのになっ！」

などと、ギャギャ姦しく鳴いたワイバーンどもは胸を張って私を見下ろす。鼻から吐き出された息が掛かってよろけそうさ。

自分でアフレコしておいてなんだがむかつく。

夜など関係なく飛べると見做す。ならば、どうか麓へ下ろして欲しいと、不平は堪えて下手に出てみる。

「なんで？」

とばかりに小首を傾げて瞬きする仕草が可愛いと思えなくもない。食べ物が無いからと伝えれば、先ほど貢がれた首のないアナコン

ダもどきと開きになった変色熊もどきをワッサと片羽を広げて促された。召し上がれません。

いくら食い意地の張った日本人とはいえ、ひ弱な現代つこに現地の食材をいきなり生とか無理である。

海外旅行の第一項目でもあげられているほどだ。まずは食材に慣れてから生だろう。

それに君達はその分厚い鱗があるから問題ないかもしれないが、高い山の上で薄着の私がどれほど辛い思いをせねばならぬのか。その辺りを無駄に懇々と説くこと数十分、手を変え品を変え言葉を換え『散歩』のフリーズで渋々とだが漸く麓へ下ろしてくれることに承諾をしてくれた。

話が分かる連中で何よりだ。

唯一のよすがとなってしまうたA4のファイルが入る大きな鞆をどうしようかとも思ったが、置いていく気にもなれないので学生のように背負うことにする。みつともないが、誰に見咎められることもないので開き直る。

地面にぺたりと長い首を伏せた黒のワイバーンへ失敬して鼻面から登り、首の付け根まで這ってなんとか落ち着く。命綱もシートベルトもないので非常に安定が悪く、身に纏ったリクルートスーツはミニでないとは言え、タイトな膝丈だから腿まで捲くりあげないといけないのが難点であるが止むを得ない。贅沢は言えない身の上である。

そんなこんなで何とか準備が整ったところで跨ったワイバーンへ声を掛けた。

落とさないようにと気遣ってか、黒いワイバーンはゆっくりと羽を広げ、逞しい脚で地を蹴り玄関口という名の崖から飛び下りる。

なぜか、茶と銅あかも続いて飛び下りてきた。肩越あかしに振り返ると、残りの三頭は食事をするにしようである。

薄闇に覆われた空に、上体を起こして眼下の景色を眺める余裕など私にあるはずもなく、太く長いワイバーンの首に伏せて必死

にしがみつく。

何せ両手両足を回しても届かない太さの首である。効果はさておき少しでも空気抵抗を減らしておきたいと思うところだろう。

風に乗り、少ない羽ばたきで緩く旋回しながら雲を抜けて大地に向かつていくが、垣間見える大地は木々に黒く覆われワイバーンが下りれるような場所が見受けられなかった。

私が穴に落ちた日は秋も真っ只中だというのに真夏日であったため薄着であった。よもや、このような事態に陥るなどは想定しておらず、ワイバーンが気を使ってくれていたとはいえ、長時間風に吹かれ続けるのは寒いのである。寒いのだよ。まじで。

地平線の向こうから微かに覗いている日の明かりも弱く、体感的には初冬と思える気温と吹き付ける風はあつという間に体温を奪っていく。

早々に麓へ到着してもらわないと、漏れなくやんごとなき下半身事情が発生してしまう。

漏れなく漏れる……いやいや、そうではなくて。などと上の空であつた視界の隅に何やら光る物が一瞬見えた。

気のせいだろうかとそちらを見るとやはり光っている。

光っている　　というのは語弊だろうか。

聳え立つ木々の中、だいぶ地面に近づいてきたのかぼつりぼつり開けた土地が見えてきた。

その開けた場所の一ヶ所で雲も無いのに紫の稲妻がパシパシと横に閃光している。上下ではなく横にだ。

更には、細い蛇のような炎が地面を走っては何かに当たったかのように弾けて火の粉を散らしている。

微かに人のような小さな影が幾つか見えた。

あれは一体なんだろうか？

06 私、実際には肝が据わっていなかったようです。

およそ四〜五階くらいの高さから頻繁に閃く光の元を見下ろす。微かに覗いていた日も既に落ち、小さな月が二つ上がりだしている。って、二つ？ え？ 恒星？ 衛星？

いや、今気にするところではない。薄暗がりで顔の認識まではできないが、六人の人影と二十数名の人影が対峙して争っているようである。

一人が片腕を前に突き出すと持った杖の先から炎が走り、対抗側の一人が同じように片腕を突き出し杖の先から放った雷を炎にぶつけて散らしている。何だこのマジックショーは。

少人数側も健闘しているが、やはり人数多い方に利があるのかジワジワと押されてきている。

何がどうしてどうなっているのか。助けに入るべきなのだろうか。といっても私が行ったところで何の役にも立たないだろう。

何せ、他の連中は剣を討ち交わしているのだから。

竹刀ではなく、剣である。日本刀みたいに細長い剣ではなくて、もう少し……腕の太さくらいの幅がある剣を振るっているようである。

月の光に反射した刀身が見えた。

ここはやはり見ぬ振りをしてよそを当てるのが良いかもしれない。そう思ったときである。

それまで下で争っている連中から気付かれない程度にゆっくりと羽ばたいていた銅あかがいきなり鳴きだすから思わずびびった。

ビクツと竦んだ反動で危うく落ちそうになる。

『滾るぜー！ 喧嘩と花火は江戸の華よっ！ 俺もやるぜー！ ヤッてやるぜー！！』

咄嗟に見た銅あかは宙で上体を反らせ、目は興奮してなのか爛々とし、勇んだ様子で猫キック、ではなくワイバーンキックをその場で激し

くして見せ、事もあろうに争っている連中目掛けて急降下していきやがる。

こいつ馬鹿だ!!

「ちよ、ちよーっ！ 待て！ 待って！ 戻る！ 戻れーっ!!」
人間より遥かにでかいワイバーンに押し掛かれたら人間なんぞ軽くプチッといってしまう。冗談ではない。もしかしたら、衣服とご飯を提供してくれるかもしれないというのにつ！

いや、今さっき見捨てようとしたが消極的なのと積極的なのとは罪悪感と雲泥の差である。

かなぎり声をあげて呼び戻そうとする私に、銅は「え〜？」と不満そうに首を巡らせつつ、私の声に応じて仕方なさそうに急上昇する。

局地的暴風により木々が今にも倒れそうなほど撓っている。根っこがミシミシと悲鳴を上げているが辛うじて倒れるまでには至らず緊張が緩む。

下ではワイバーンの急襲に驚き、全員が上空を見上げていた。

どうしよう。いきなり団結してこちらを襲ってきたりしないだろうか。あの雷とか炎とかに当たると激しく焦げそうなんだが。

一旦は上空に戻った銅だが名残惜しいのか、連中の上でぐるぐると旋回している。

威嚇しているようにも見えるのでそばへ呼び戻そうとしたのだが、私が声を掛けるよりも早く大人数組みが慌しく逃げ去ってしまった。助けた……ことになるんだらうか。謝ったほうがいいのらうか。困った。

目線を合わせられる距離ではないが、残った少人数組みも何やら戸惑っている様子。

近寄ってもし彼らが物騒な行動を取るにしてもワイバーンが三頭もいるのだから無闇に襲ってはこないかもしれない。それに、助けてもらってありがとう。お礼に食べ物と衣服を譲りましょう！ なんて都合のよい展開になるかもしれない。彼らにしたら追剥的かも

だが。

とりあえず、これが初めての現地人なのだから当たって砕けるである。

黒へお願いし、地上へ下りてもらった私は滑り台の要領でワイバーンの羽から下りる。

窮屈ながらも三頭が下りれるスペースへ器用に銅あかと茶も下りてきて羽を畳む。

少人数組みは片腕を上げて巻き上がる風に飛び散る砂利を避けつつ遠巻きに様子を伺っていた。

上空にいたときには気付かなかったが、数名が地面に倒れている。死んでいるのだろうか。いや、起きないのだからほぼ死んでいるのだろうけど、やはりこんな物騒な場所におりるべきではなかったかもしれない。

とはいえ、既に下りてしまった手前、ではさようならで済むはずもなく、逡巡している私に一人の剣を持つ男がゆっくりと様子を伺いつつ静かに声を掛けて近づいてきた。

イケメンよ、アナタの言葉が分からんっ！

しまった。言葉が通じないとは失念だった。どどどどどうしようっ！

「あ、あのっ！」

咄嗟に日本語が口に出てしまったが、歩み寄った男も聞きなれない言葉に驚いた様子で更にゆっくりと話しかけてくる。うむ、分かりません。

「すみません。何を仰ってるのか分からないのですが……」

申し訳なく首を振ってジェスチャーで試みる。

男は背後に佇む仲間を一度振り返り顎をしゃくって見せると更に男が一人ゆっくりと近づいてきた。

互いに互いの様子を伺いながらのゆっくりとした動きである。

最初に歩み寄ってきた男もイケメンであったが、後から近づいてきたのもイケメン、更に後ろにいる連中もイケメンとイケメン尽く

し。

何と言うか、イケメン万博？ 六人だけだが。肌の色合いとか顔の造詣といえはいいのか、白人風なのが二人、黒人風、中近東風、アジア風、特亜風が各一人だ。

一番最初に私へ近づいたのが褐色の肌に黒い髪と黒い目をした中近東風の男である。良く言えば己の信念を持った、悪く言えば頑固一徹そうな面立ちに緊張からなのか厳しい表情を浮かべている。パツと見たところ、この人がリーダーっぽい。最初の一步を踏み出してくるあたりが、であるが。

ついで、顎をしゃくれ進み出てきたのは白人タイプの白い肌にプラチナよりも少し白味掛かった金髪と、暗い場所なのではつきりしないがダークブルー？ いや、紫掛かった目をしているようだ。そこはかとなく育ちの良さが顔に出てるような柔和な顔立ちに、私を驚かさないうようにと気遣っているのか、私の卑屈がそう思わせるのか、脅える子供に向けるような笑顔を浮かべている。

もう一人白人風の男もいるのだが、ヨーロッパ風に比べて鼻につかない程度の野心と自信を漲らせている美中年を勝手にアメリカン風味と決め付けてみる。同じ金髪でもヨーロッパより濃いゴージャスな金髪で、距離があるために目の色までは分からない。

六人の中では年長らしいアメリカンは中年層の割りには体に弛みも見えず、他の面子も肉体派らしいが負けず劣らずな体軀をしているように見える。雰囲気からアメリカン社長さんって感じた。やはり手だな？ と思わせるといふか。

他の連中を伺う前にヨーロッパピアノが静かに声を掛けてきたのだが、やはり何を言っているのか分からない。

これでは食事を分けて欲しくても訴えることができない。と、そこで私は閃いた。

「あつ！」

筆談ならぬ、絵談ならばいけるのではないかと、慌しく背負っていた鞆を肩から外そうと一瞬彼らから視線を外してしまった。

その瞬間、あたかもホームで新幹線の通過を見送ったかのように風が目の前を吹き抜けていった。横からではなく上から下にてあったが。

何事かと顔を上げると、三メートルほど離れていた中近東風の男が一メートルも満たない至近距離にいた。

そんな私達の間を遮っているのはワイバーンの太い茶色の尻尾。逆向きに寝ていた棘が今は威嚇するかのようになっている。

マールに渦巻いていた黒の模様が尻尾の後半を真っ黒に染めていた。

なるほど、今の風はこの尻尾が振り下ろされたからか。とぼんやり納得する。

しかし、達磨さんが転んだのもりか？ いきなり、ナンなのだ？ と彼の表情を伺うためにゆっくりと視線を上げてみれば、彼は片手を振り上げたまま固まっている。

その振り上げた手に持っているのは月光を受けて輝く剣であり、先ほどの争いでついたのか刀身には赤い雫と脂の汚れが薄くこびりついているのが見えた。

ソレ、振り下ろしたら私の脳天に直撃しまいか？

ズンツと銅が^{あか}が一步前に踏み出た振動で我に返った私は慌てふためき黒の元へと駆け出す。

何か背後で言っているが言葉分らないしそれどこではない。殺されようとしたのだ。

聞く耳なんぞ持つ場合ではない。が、いかんせん戦争も知らない平和な現代っ子、スラムなんて荒廃地域も無い日本人に殺傷事件なんて交通事故に合うであろうという認識よりも低いのだ。

はつきり言えば、てんばっていたの一言である。極限の恐慌状態で黒の背に戻ろうとした。

今の私に取っては唯一の安全地帯なのだ。

だが、つるつるの鱗に指を掛けても虚しく滑るばかりで、下手に爪を掛ければ確実に剥がれそうである。手は震え、歯の根が合わな

い。ヒールが低いとは言えパンプスは鱗で滑るし、足を開こうにもタイトなスカートでは限りがある。傍から見ていればさぞかし滑稽な姿を披露したことだろう。

ズンツ、ズンツと響く銅あかのと思われる足音と怒声、金属のかち合う音も聞こえるが私は自分のことだけで精一杯である。

そんな中、一際鋭い怒声が響いた。場を鎮めるための一喝といえるだろうか。思わず肩越しに背後を振り返るほどの覇気だ。

人の合間を我が物顔で練り歩く銅相手あかに剣で追い払おうとする連中、そして私に剣を向けた男の後頭部を掴んで土下座を強いらせ、自分も地面に膝をついているヨーロピアンな男が見えた。

ヨーロピアンが必死な形相で何か訴えていた。

余りにも必死なその表情に、迷いが生じて絆されそうになる。

怖いのだが、一応話を聞くべきだろうか。

それとも剣で追い払おうと必死な人間相手へ、妙にやる気を見せている銅あかを留めるべきであろうか。

取り合えず足音がうるさいので、銅あかの四股まがいな足踏みは止めさせることにした。

07 私、美人も見ただけなら好きなんです。

銅をなんとか大人しくさせ、ふと気付けば白人風がもう一人増えていた。

どこから湧いて出てきたのか、ヨーロッパよりも更に透き通るような肌の白さと、アメリカン並にゴージャスな金髪をした美人である。

奥に馬車があるから、あそこから出てきたのだろうか。お嬢様か。一七〇センチは超えてそうな美人は私から見れば長身なのだが、他の六人は更に上背も厚みも横幅もあるから美人さんの華奢さが際立っている。か弱そうで儂げな感じだ。

パリコレなんかに出そうなモデルスタイルだし、キリリと形良く描かれた眉にアーモンド型の目はちよつと眦が上がってて気が強そうだ。通った鼻筋、程好い薄さの唇とまさにこれぞ黄金比といった顔立ちが凡人である私には眩しすぎるっ。

イケメンといい美人といい、画面の向こう側にいるからこそ楽しめるのに、至近距離にいられるとはしゃげないではないか。まったく、イケメンも美人も目の前で見るとは違う。

そんな眩しい美人さんとはいささか距離があり、目の色までは分からないがこちらを見ているのは分かる。

あれ？ と一瞬不思議に思ったのだが、闇の中なので確かめようがない。

些細な違和感を覚えて美人さんよりも近い場所にいるヨーロッパ人の顔を見る。次いで美人さんの隣にいるアメリカンを見る。再度、美人さんを見る。

なるほど。距離があるのに眉がくつきりしてるとか目がきりつとしているとか、何で分かったのかが分かった。

同じ白人風なヨーロッパ人やアメリカンに比べて目と眉が濃いからだ。しかし、口紅はしていないようである。

化粧があるのか、と感心してしまった。というのも、他の六人はロビンフッドのエキストラでもしてるのかといった装いなのである。目の前のヨーロッパ人とアメリカン、美人さんはフード付きの足首まであるクロークを着ている。皮でできたクロークの厚さは薄く、^{なめし}鞣しているのか着古しているのか汚れが酷くかなりみすばらしい。

他の連中もみすばらしさは同様で、獵師が着ているような毛皮っぱいチュニツクに厚手の長袖シャツ、前腕には皮の籠手が巻かれ、薄汚れた皮のケープを纏っていた。

白人風三人以外は剣を持っているのでクロークだと邪魔なのだろうと見当をつける。

パツと見、時代錯誤も良いところなので化粧があるとは思いつかなかったのだ。

ヨーロッパ人と私を斬ろうとした中近東風の男を除き、美人さんを中心にアメリカンと他の男どもが私を伺いながら何か話し合っている。

美人さんの言葉にアメリカンが動揺し諫めてるっぽく、集まっている三人の男もアメリカンに同調しているようだ。

中近東風の男も振り返って声を上げたが、美人さんの諭すようなやんわりとした返事に押し黙ってしまう。

先ほどの一喝の声と美人さんの声が同じに聞こえる。見かけに寄らず案外声が低い。渋い美人だ。

一人静かに私を見ていたヨーロッパ人が視線を逸らさずに何か話しかけてきた。と思つてキョドっていたら美人さんが答えていた。

私ではなく美人さんに話しかけてたようだ。

視線を合わせたままだから、私に話しかけたのかと思つたではないか。

というか、視線を逸らさないヨーロッパ人は、私の挙動を見逃さないようにということか。

自分も目が離せないのとお互い様ではあるが、自分を棚上げしていささか不快に思う。

そんな風に思っている私をよそに美人さん達はまだ何かごそごそと話し合つ中、ヨーロッパ人が再び静かに何かを喋りだした。

今度は私に話しかけたようである。

害意はないですよとアピールするように柔らかな笑顔を浮かべつつ、クロークの内側から何かをゆっくりと取り出した。

海外の路地裏で、拳銃を持つ強盗と出会ったときに懐から財布を取り出すようなゆっくり具合である。

なるほど、と漠然とではあるが理解した。

先ほど中近東風の男が切りかかってきたのは正体不明の私が突然動き出したからとつさに防衛しようとしたようだ。

慌てふためいた日本人が素早く懐から財布を取り出そうとし、拳銃を取り出すと思つた強盗が撃つてしまったという話を聞いた覚えがある。

それと似たような気がしてきた。

私も鞆を下ろすときはヨーロッパ人のように静かにゆっくりと、相手を脅えさせないように動かなければならなかったのだ。

私は私が無害であると認識しているが、彼らが認識しているわけではないのだから警戒するのは当然だったのである。

ましてや背後にワイバーンを三頭も従えているように見えるのだから、私も迂闊だったのだ。

とはいえ、ゆっくりとだが歩み寄ろうとするヨーロッパ人が怖くないわけもなく、当然私は背後の黒に擦り寄つて警戒をする。

ヨーロッパ人はちよつと困つたような笑みを浮かべ、もう数歩近寄り地面に取り出した何かを置いて元の場所まで下がる。いや、中近東風の男も引っ張つて美人さんのところまで下がっていつてしまった。

地面に置かれたのは銀の腕輪であつた。

怪訝に思いつつ、腕輪とヨーロッパ人を交互に見やっていると、ヨーロッパ人がどうぞどうぞと勧めるように掌を揺らしている。

返事を期待したわけではないが、思わず縋れる黒を見上げると類

擦りをしてきた。違う。そういう意味で見たわけではない。とつさに黒の鼻面を押し返し、おそろおそろ置かれた腕輪を取りにいき、ダッシュで黒の傍へと戻った。

再度ヨーロピアンを見れば、今度は右手の指で作った輪を左手首に通す仕草をしている。

この腕輪を嵌めるといふのか。窄めた指先を輪に通す仕草をして見せると、疑って腹を探るのも馬鹿らしく思えるような笑顔で何度も頷いている。

人の良さそうな顔立ちとは色々と得だと思いつつ手にした腕輪を見下ろす。

硫化したシルバーのごとく黒ずんだ金属に、形の歪んだ一センチ大の赤いガラス玉が埋められた飾り気のない腕輪である。

シルバーというより、この黒み具合は鉛のように見えるのだが、釣りの仕掛けに使う、噛み潰し錘と似た質感と色合いである。

鉛ほど重くないのだが、長時間身につけていて害にならないだろうか？ 鉛ではなさそうだから大丈夫か？

赤いガラス玉もルビーといった宝石ではなく、透明度の高い本当に玩具のようなガラス玉だ。

ヨーロピアンを始め、全員が固唾を飲んで私を見つめている。無駄にプレッシャーを感じる。

仕方がないので恐々と腕輪を嵌めてみた。少し、というよりかなり大きく、指を広げていないとすっぽり抜け落ちそうなほど大きい。で？ と思つたら、音もなく縮まって手首にフィットした！ 何コレ怖いっ！ ちよっ！ 騙したのか、ヨーロピアン！！

慌てて抜き取ろうと焦っていると、赤いガラス玉の中から、穴から這い上がるかのようによいこらせと煙より濃い物体が出てきた！ ひいいいっ！ ……………っ、ヤモリだ。ニホンヤモリ！ ちっさい羽の生えたヤモリが出てきた！

ボディは透けているけど煙より重そうな、濃いエクトプラズムみたいな感じである。

月光を受けてところどころ虹色に反射するのは光学迷彩か。君は素子か。

エクトプラズムなヤモリは円らな瞳を私に向けてジッと見つめてくる。

あらやだ、何コレ可愛い。

自分からは近寄れないが別に爬虫類とて嫌いではないのだ。できることなら動物類を愛でたいと思っているのである。この嫌な特技がなければ。

ほんの数秒のことだが見つめ合ったヤモリはペロツと細い舌を出す。と次の瞬間にはガラス玉からスルスルと出てきて、怪しい鉛の腕輪を一周しガラス玉の中へ戻っていつてしまった。

何がしたかったのだ。途方に暮れる。というか、コレ外れないのだろうか。

手首に隙間無く嵌っているので爪を差し込む隙間しかない。

とてもではないが手の太い部分を通す余裕もなく、手首を切るか腕輪を切るかの選択しか考えられない。

ちくしょう、ヨーロッパアンめっ！ 苦笑浮かべるヨーロッパアンを睨みながら無理矢理腕輪を回していると、ピシッと小さな亀裂音がした。

待て。そんな強い力で回していないではないか。金属としての誇りはどこへいった！！

焦る気持ちとは裏腹に小さな亀裂音は更に続き、腕輪には蜘蛛の巣のようなヒビが走る。

そして、アツと思う間もなくポロポロとこぼれ落ちて無くなってしまった。

いったい、なんなんだっ？！

擦りながら手首の様子を伺ってみれば、先ほどの羽付きヤモリと酷似した白い刺青が入ってるのだがっ！

玉の肌は何すんだーっ！ あ……刺青の舌がペロツと出た。

刺青なのに、なんかヤモリが動いてるのだが？

ガラス玉から出たときは色のなかった円らかな瞳が、今はガラス玉と同じ透き通った赤い瞳になっている。遠くから見たら、赤い黒子？

「……私の言葉が通じますか？」

呆然と口を開けたままであった私に、柔らかな声が問いかけてきた。

ハッ！ と顔をあげるとヨーロッパピアノが再度声をかけてくる。

「言葉、分かりますか？」

日本語だ！！

08 私、ネチっこいんです。

「え？ あれ？ 何で、いきなり日本語……」

咄嗟に浮かんだ疑問が口に出てしまったが、切っ掛けはやはりこの手首をご機嫌に周回しているヤモリだろうか。

「アナタが話されている言葉は二ホン語なのですね？」

ええ、アナタが”今”話されているのも日本語ですが？

ぎこちなく頷く私に、ヨーロッパ人は柔和な笑みを浮かべて語りかけてくる。

「私が話しているのはソルベリア語というこの辺りでは一般的な、実質的な共通語です。ソルベリアはご存じですか？」

知りません。

頭を振って返す私に、ヨーロッパ人は「そうですか……」と呟く。その後ろでは他の連中がヒソヒソと私を伺いながら言葉を交わしていた。

確かによくよくヨーロッパ人の唇を見ると、言葉の音と動きがあつていない。しかも、唇を動かしてから音が聞こえるのに若干だが差を感じる。

ソルベリア語とやらを話しているというヨーロッパ人。しかし、私は日本語を話し、彼の言葉も日本語に聞こえる。切っ掛けはヤモリだと見当付くのだがいったいどういった仕組みでいきなり会話ができるようになったのだろうか。

少なくとも白亜紀へのタイムスリップ説は潰えた。

「では、精霊石も……ご存知……ではない。精霊……も、ご存知ないようですね」

問い掛けてはみたものの、精霊石ってなんぞや。精霊ってなんぞや。といった私の表情でヨーロッパ人は察したらしく自己完結していく。

まあ、イギリスのフェアリーとか付喪神的な精霊という意味なら

知っているのだが。

そして、後ろの連中がまたもやヒソヒソと言葉を交わしている。

「アナタにお渡しした腕輪にあった赤い石が精霊石です。赤い石には言語の加護を与える精霊が宿っていたのですが……どうやら、アナタを気に入ったようで。仮宿である精霊石からアナタへ手順も踏まずに住まいを変えてしまいました」

何だろう、ヨーロッパのトホホ的な笑みは。以前にも似たような笑顔を見たことがある。

私と離れるのを嫌がるペットの飼い主と同じ笑顔だ。

しかし、このヤモリが精霊なのか。二頭身並に小さくて可愛い金髪な少女で、キラキラとした羽が生えているのとはかなり姿が異なっているようだ。共通なのは羽だけであるが、コウモリのような羽とトンボみたいに透き通った羽とは雲泥の差ではなからうか。

いや、可愛い。うむ、君の羽も十分可愛いから。

胸中の思いを察したのか、手首からニョッキリと上半身を起こし、白目のない円らかな瞳からは感情が伺えにくいわりに、そこはかたなく物悲しそうな気持ちを訴えてきている。気がする。

というか、下半身は手首に彫られた刺青のようなままなのに、起こした上半身はエクトプラズムのように半物質化してるのはなんだろうか。

心の内で可愛いと連呼していたら満足したのか、再び刺青という二次元へ戻ってしまった。

「……あの、この精霊が私に住まいを移したということですが……その、何か問題がありますか？」

私に。身体的に。精神的に。

エクトプラズム状態で触れていてもまるつきり皮膚には感觸がないので、気にしなれば存在を忘れてしまいそうなほどののだが。

「ええ……いえ、問題はありません。精霊は乞われて気に入れば人間に協力してくれますが、契約を破棄してまで別の人間へ自ら協力するのは珍しいもので……元は言葉の通じない地域で商談を交わす

際などに用いる道具でしたので、アナタが気になさる必要はありません。今は少し会話に間が生じてると思いますが、精霊が馴染めば間も無くなりますよ」

衛生中継のように微妙なレスポンスもその内なくなるのか。なるほど。何と便利なアイテムだ。求めていた答えとは幾分違う内容ではあったが、一般的なアイテムらしい。

しかし、言葉は理解できるのだが、精霊と契約がどうか意味が解せない。解せないが、問い掛ける間もなく困惑しながらヨーロピアンは気を取り直して話しかけてくる。

「ところで、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？ 私は、祝術士しゅじゆしのローフと申します」

祝術士　またもや聞きなれない言葉である。だが、意味を問う暇もなく、ローフと名乗ったヨーロピアンは、右手を左胸に添えて軽く頭を下げてきた。

「……立科たてしなと申します」
同じ仕草を返そうかとも思ったが正直作法が分からない。
軽く会釈程度で頭を下げるに留める。

「タテシナ殿、ですね。こちらは、ヘルート」
そう言ってローフさんが掌を返した先にいるのは、例の中近東風の男だ。

「突然のこととはいえ、助けて頂いたアナタへ無礼な振る舞いを取ってしまい申し訳ありませんでした」

「………申し訳なかつた」
相変わらず苦虫を噛み潰したような渋い表情で、ヘルートやらが深く頭を下げてくる。

殺されそうになったことはまだ許す気になれんから、君は敬称無しだヘルートよ。

しかし、ローフさんには上手い具合に先手を取られてしまった。そこはかとなく私にとって嫌な流れになりそうである。

人の好きそうな顔をしていて、ローフさんはなかなか曲者っぽ

そつだ。

先に謝られてしまえば許さざるを得ないというか、その辺を承知でヘルートに謝罪させたような気がする。

何せ、顔を上げた当のヘルートはやはり『こんな小娘に』みたいな表情を浮かべているし、私が何か仕出かすのではないかといった疑いの眼差しを向けているのだ。後ろにいる連中も似たような目付きをしているが。

とは言え、ここで断わるのであれば器量を疑われそうだし、右も左も分からない現状の上、食べ物と衣服が欲しいという下心が私にはある。

「いえ、こちらこそ驚かせてしまい申し訳ありませんでした」

即効で謝罪返しをしておく。もちろん下心のためにだが、そんな私の内心を知ってか知らずか、ローフさんは変わらず柔和な笑顔を浮かべている。

「タテシナ殿は騎調士きぢゆうしなのでしょうか。毒竜を従えられる方を見るのは初めてです。しかも、同時に三頭も。失礼ですが、まだ歳若く見える女性なのに素晴らしい腕前ですね」

うむ。さっぱり分かんつ。

ヤモリのお蔭でソルベリア語とやらを勝手に日本語へ翻訳してくれるのだが、言葉は分かっても意味が理解できない。

毒竜とか物騒なんだが話の前後からして、毒竜というのはワイバーンのことだと察する。

騎調士とはなんだ。土と言うから何かしらの専門職とは思うが、ジヨッキーみたいなことか？ 祝術士とかいうのも、ローフさんが先ほどタクトみたいな杖を使って雷を放っていたので魔法使いみたいな意味だろうと推測する。

「いえ……その……ありがとうございます……？」

とりあえず、意味は分からないが、日本のお茶を濁しておこう。そつだ、魔法使い。白亜紀説は消えたが、科学の粋を集めた未来へのタイムスリップ説はどうだろうか。

あのタクトの中にはマイクロチップとか科学的に小さい物詰まっ
ていて、何らかの仕組みで雷を放出とか……移動に馬車とか金属の
剣を使ってるあたりこの説も無理だな。未来だったらきつとライト
セーバーを使っているはずだ。

肩を落とす私にお構いなく、ローフさんが話を続けている。

「実は、我々はソルベリアからグララドへ向かう途中で山賊に襲わ
れ、あわやというところをタテシナ殿が現れてくださり助かりまし
た。ですが……」

とローフさんが振り返った先には、二頭の肥えた馬とさえいい
のか、スリムにして首と足を長くしたカバと言えはいいのか、初め
て見るタイプの動物が馬車に繋がれ地面に倒れたままピクリとも動
かないでいる。

恐らく件の山賊とやらに襲われて絶命したのだろう。山賊か……
さっきのは山賊だったのか。恐ろしいところだ、どうしよう。

「ご覧の有様です。訳あって先を急ぐ旅なのですが、馬が潰されて
しまい次の街まで優に二日は掛かります。……ヘルートの振る舞い
に我々を警戒するのはご尤もとは思いますがタテシナ殿。どうか、
我々をグララドまで、いえ！ 次の街までも構いません！ 送って
頂けないでしょうか？」

………ん？ どういうことだろうか？ 意味が分からず小首を
傾げた私へローフさんが更に言い募る。

「毒竜の翼であれば、次の街までは数刻で到着します。グララドの
王都まででしたら、一日……いえ、二日あれば十分です。先を急ぐ
あまりに街道から外れて進んでまいりましたが、街道へ戻る時間も
今は正直惜しいのです。勝手な申し出に思うこともございませう
が、ここで巡り合えたのも何かのご縁。アナタの力をお借りしたい
のです。お願いします！」

熱くお願いをされてしまった。

つまり、私をワイバーンの飼い主と想っての頼みごとらしい。

訴えられた内容は理解したが、ワイバーン達の飼い主というわけ

でもなく、彼らが言うことを聞くかと言われたら実に微妙なところなのだがどうしたらよいのだろうか。

「続きは私からお願いしよう」

返答に困っているところへアメリカンな美中年が話に割り込んできた。

「タテシナ殿、先ほどは危ういところを助けて頂きありがとうございます。ありがとうございました。また、ヘルートの無礼をお詫び致します」

と、ローフさん同様アメリカンが左胸に手を当てて頭を下げている。

「私はグララドで商いを行っているマーセンと申します。こちらは娘のニレス。ローフとヘルート、そしてこちらにいるワーロル、リラバ、クエリは私が雇った護衛達です」

美中年ことマーセンさんが隣に立つ美人さんのニレス嬢から、黒人風のワーロルさん、東南アジア風のリラバさん、特亜風のクエリさんと紹介してくれた。

ワーロルさんはこの中では黒人並に一番肌が黒くて髪は赤毛だ。

リラバさんはヘルートほどではないが、少し褐色かった肌がマレーシアとか東南アジア辺りの人に似ていて髪は濃い茶色である。

クエリさんは肌の色が他の連中に比べて日本人っぽい。気持ち目が細い中国人風で、髪は脱色したような明るいオレンジをしている。ワーロルさん、リラバさん、クエリさんと紹介されるままに視線が移り、再びマーセンさんへ戻すと話を続けだす。

「グララド王へ献上する品を運んでいたのですが、ローフが話した通り急ぐあまり山賊に襲われこの始末。納期に間に合わなければ私の首が飛んでしまいます。どうか、アナタの力を貸して頂けないでしょうか。もちろん、タダとは申しません。次の街、フマールまで送って頂けるのでしたら千マウロ、グララド王都までなら五千マウロをお支払い致しますよう」

いきなり交渉きた！ が、マウロってお金だよな？ 価値が分からんっ！ 円か！ ドルか！ ユーロか！ まさか、ジンバブエド

ルって落ちだつたらどうしてくれよう。

ここらの夕食の相場は幾らなんだろうか。

日本円しか持っていないため金の話をされると心が激しく揺れまくるのだが、先にワイバーン共へ聞いてみないことには私の一存で決められない。

領きそうになるのを堪えリーダー格である黒いのに確認しようとしたら、マーセンさんが慌てた様子で声を張り上げてきた。

「一万！ 一万マウロで、どうかお願いしたい！！」
「倍に跳ね上がった！！」

09 私、早口は得意なんです。

「今、手持ちが一万マウロしかありません。グララドへ着けば更に五千マウロを上乗せ……いえ、タテシナ殿の言い分でお支払い致しますしょう！　どうか我々をグララドまで連れて行って頂きたい！　お願いします！」

切羽詰まった声で訴えてくるマーセンにこっちが戸惑ってしまう。別に金額が見合わないわけではないのだが、というか相場を知らないので返事のしようもないわけなのだが、取りあえず落ち着いて欲しい。

「ちょ、ちよつと、待ってく……」

ださい、とマーセンの勢いをいったん止めようと両手を上げて掌を向けた途端、マーセンは黙ってくれたが護衛組が一齐に剣へ手をかけた。

「またもやフリーズ警報か！　どの動きで彼らのスイッチが入るのかリストを要求する！」

「落ち着きなさい」

動くに動けないまま固まる私と護衛組に割って入ったのはニレスさんだった。

麗しい見目に寄らず、女性にしては低めの声がやけに寒々しい響きをしている。冷視する先は護衛組だ。

「ニレス……っ」

一歩進み出るニレスさんにマーセンが小声で諫めるが、ニレスさんは流し目で黙らせる。

「共通語も知らない娘相手に何を憤る必要がありますか」

「しかし！」

「我らに害を成そうとするならば、わざわざ祝術を駆使するまでもなく背後の毒竜に命じれば済むこと。祝詞を詠うよりも舞うよりも早く我らを始末できましよう。貴殿らは些細なことではいちいち殺気

立つほど鍛錬が足りないのですか？」

ニレスさんの穏やかながらも痛烈な言葉に護衛組が押し黙る。

「言葉はもちろん、衣服からして見たことのない装い。精霊も知らぬというほどです。大陸の習慣を知らぬのならば彼女の突然な行動も道理が立ちましよう」

「ですが、我らの油断を誘うという手もございます！」

「我らの油断を誘い、それから祝術を舞うと？ 詠うよりも早く、使役する毒竜に一言命じれば我らが足掻く暇も、彼女に一矢報いる暇もないでしょう」

冷静な状況分析ありがとうございます。憶測含めて状況を今ひとつ把握しきれない私にはありがたい情報ではあるが、物騒な憶測を当人の目の前で口にするのは避けて頂きたいところだ。

渋々ながら護衛組はニレスさんの言い分にひとまずは納得したようである。

「重ね重ねの無礼をお許し頂きたい。マーセンに何か仰りたいようでしたか？」

ニレスさんが何もなかったかのように私へ問いかけてくるが空気が重い。

「えっと……その、まずは……毒竜？ の意向を確認させてください」

「タテシナ殿は騎調士ではないのですか？」

ニレスさんが不思議そうに問いかけてくる。

「いえ……騎調士ではないです。騎調士というのもしりませんし」
息を飲んだり微かに声を漏らしたりと、連中がかすかにどよめくいち早く気を取り直したのはニレスさんであった。美人は驚く顔も美しい。

「では、どのように毒竜を手懐けたのですか？ 毒竜は竜種の中でも特に気性が荒く攻撃的でそう容易く懐くことはありません。しかも三頭も引き連れておられる。騎調士としてよほどの腕前とあったのですが……騎調士自体も知らないとは……」

本当は六頭を侍ら^{はべ}かしてたりします。というか、どう説明すれば良いのか。私の特技を説明してすんなりと納得してもらえるのだろうか。

「……勝手に？ その、動物に好かれやすい体質でして……」
しどろもどろに答えてみたら、案の定護衛組が胡散臭い目付きになった。自分でも胡散臭いと思うがなっ！

「騎調士とは野生の動物を捕らえ、人が扱えるようにまたは騎乗できるように調教し飼い慣らす者を言います。軍であれば必ず一人や二人は従事しているのですが、ご存知ないのですか」

知りません。

ニレスさんが呆れ混じりに説明してくれたが、知るわけもない。

返事をするたびにどよめくので、さりげなく癪に障る。

「と、とにかく、毒竜達に聞いてみないことには返答のしようがないので、ちよつと待ってもらえますか？」

その場の微妙な空気も変えたいというのもあり、そろそろと挙げていた両手を下ろしながら当初の予定を伺ってみる。

連中は互いの顔を見合わせた結果、ニレスさんが代表で頷いてくれたので黒のそばに近寄る。もちろん、連中に背を向けるなんて怖いことはできないので横向きだ。

「グララドって知ってる？」

別に声を潜める必要はないのだが、なぜかひそひそと語りかけてしまう。

そういえば、このヤモリ精霊はワイバーンの言葉は翻訳してくれないのだろうか。ふと疑問に思いヤモリのいる手首を見下ろすと、私の仕草から疑問に気づいたのかローフさんが声をかけてきた。

「それは言葉を話せる人間のみにも有効なのです。感情を訴える動物相手には効果がないのですよ」

ローフさんに視線を向けると、いささか申し訳ないような表情を浮かべていた。

なるほど、と納得して小さく頷きで答える。

一方、私の問いに黒が得意気に胸を張っていた。グララドという場所を知っているらしい。

「知ってるんだ？　じゃあ、そこまで『散歩』行こうか」

「行く！」と長い尻尾を左右に振る黒。

「彼らも乗せて欲しいんだけど？」

『嫌！』と不満気に黒は尻尾を地面に叩きつける。

「……………」

『……………』

上等だ。巢から出るとき、君は屈辱を味わったことを忘れていたよ。あのときの悔しさをもう一度経験したいというのだな？

宜しい。ならばその挑戦受けて立とうではないか。

旗揚げゲームでは負け知らずなのだよ。いざ！

『ご飯？』

「違う！」

『黙れ！！』

暇を持て余したらしい銅が顔を割り込ませて一声鳴いたが、私と黒の一喝ですぐすこと伸ばした首を引っ込めた。茶色は何してるのかと見れば、少し離れた場所で太い樹に牙を擦り付けて歯磨きだか牙砥ぎに精を出していた。

銅は馬鹿で、黒は俺様で、茶色は少しぼんやり気味のマイペース君らしい。大人しくしているようだし茶色はそっとしておこう。では、改めていざ！

「グララドまでお散歩行く？」

『行く！』

「彼らも一緒に」

『嫌！』

「散歩」

『行く！』

「グララドまで」

『行く！』

「彼らも」

『嫌!』

「嫌ならここでさようなら」

『嫌あつ!』

赤揚げて白揚げないで赤下げない。淡々と「散歩」「彼らも」と繰り返しながら徐々にテンポを上げていく。

ちよつとした自慢だが、私は外郎売りの文句もパーフェクトである。この程度の早口など造作もないのだ。

地面に棘のついた尻尾を叩きつけては左右に振るので、良い塩梅に地面が掘り起こされている。関係ないが開墾するときにはいいかもしれない。農家のバイトに使えないだろうか、などと思いつつ更にテンポを上げる。

ギヤ、ギユ、ギヤツ! キユ、ギユツ! との返事に尻尾が追い付かなくなってきた。

そろそろ勝負をかけよう。

「散歩」

『行く!』

「グララドまで」

『行く!』

「彼らも」

『行く! い、嫌! 嫌つ!』

「遅い。もう行くつて言つたし」

犬が伏せをして媚びるようにグォングォン鳴いて訴えてくるが、言質は多分取れたので聞く耳は持たない。

「じゃあ、ここでさよならする?」

鋭利な爪で必死に地面を搔いている。気のせいか、目も潤んでいくように見えるが見なかつたことにしよう。

彼らからの無条件な好意に胡座をかいているという後ろめたさは無きにしても非ずだが、私には先立つ物が必要なのである。

明日の晩ご飯を買う金も無ければ買える場所さえも見当がつかない

い現状、私は鬼にもなるう！ いや、鬼になってみせる！

「彼らも乗せてくれる？」

『……………乗せる』

スンツと鼻を嚙り諦めの一鳴きをして黒は折れた。

よし、これで一万五千マウロをゲットだ。

晴々しい気分で待っていた連中を見ると、微妙な生暖かい眼差しを向けられていた。

「……………えっと、グララドまで行ってくれるそうです」

「こんな……………威厳も何もない、詐欺まがいな騎調士は初めて見た……………」

ヘルートがそつと視線を反らして小さくばやいている。貴様、置いてくぞ。

「タテシナ殿。その……………騎調士ではないとのことですが……………毒竜に名を与えてはいないのでですか？」

戸惑いがちローフさんが問いかけてきた。

名を与える？ とは？ と首を傾げる私にニレスさんがローフさんの言葉を継いで説明してくれる。

「簡単に言えば、飼い慣らした動物に名を与えると絆ができます。賢い動物になるほど絆は深く、毒竜ほどあれば声は届かずとも名を呼ばれると必ず飼い主の元へやってきますよ。馬でも時間は掛かりますが飼い主の傍へ戻ってこようとします。ほか、飼い主の命令も聞きやすくなるのですが……………タテシナ殿は騎調士ではなくともその素質はお持ちのようですし、試しに名を与えてみたらどうでしょうか」

なるほど。しかし、名前をつけたら飼い主としての責任もついてくるのではないだろうか。だが、ワイバーンを連れて街中を歩くわけにもいかないし、絶対についてきそうだし、待てを覚えてくれるなら名を付けた方が便利か？ 基本放し飼いで、腕白でも良い逞しく育て、であれば散歩もしなくて済む気がする。

「……………名前、欲しい？」

ふてくされ気味に伏せたままの黒へ囁くと、甘えるように鼻面を擦り付けてきた。欲しいらしい。とはいえ、私の名付けセンスはお世辞にもよろしいと言ひ難いものである。どうしようかと悩んでいたら、傍らで拗ねていた銅あかと齒磨きが終わった茶にも聞こえたらしく首を伸ばして鼻面を寄せてくる。

「わ、分かったから。えつと、じゃあ……」

黒に飛燕、茶には屠竜とじゅうと名付け、期待に満ちた眼差しを向けている銅あかを見て悩む。

サンポールをかけた十円玉のような鱗は夜の闇の中では綺麗にも思えるが、いくらお馬鹿とはいえサンポールではさすがに可哀想だろつ。

「……お前は、秋火しゅうか」

極一部の卓越した趣味の方達にはロマン溢れる名をそれぞれに付けてやる。

ゆるゆると尻尾を左右に振り、喉を鳴らしている様子からして喜んでいようだ。

さて、取り合えずワイバーンの件は片づいたので次は私である。

「グララドまで乗せるにあたり、先に一つお願いがあるのです」

改めて切り出す私に、なぜか緊張を漲らせるご一行。ふっかけられると警戒しているのだろうか、失礼な。

「……動きやすい服があれば分けて頂けませんでしょうか？ 後、できたら食べ物も……」

虚を突かれたように一瞬呆気に取られた表情を浮かべていた連中だったが、さすがは商人。いち早く我に返ったマーセンが答えてくれた。

「も、もちろん！ それだけで構わないのですか？」

「はい、この服装だと……毒竜に乗るのは厳しいので、できたら皆さんと同じような物を譲って頂けると助かります」

マーセンさんから貰ったお金で新しく買った服を返すもよし、マーセンさんから貰ったお金で新たに服を買い、借りた服を洗濯して

返すもよし。どういう形で返すにしろ、マーセンさんからお金をもらってからになるがな！ まさか、服と食べ物と報酬がすり替わっていた、なんてことはないと思いたい。

「確かに……その服では毒竜を駆るにはご不便でしょう。分かりました。ニレスの服をお譲り致しましょう。しかし……この辺りでは子供とはいえ女性は足を見せない風習ですが、タテシナ殿はどちらからいらしたのですか？」

思案気に逡巡したマーセンさんは私に答える傍らニレスさんへ頷いてみせ、ニレスさんが馬車へ向かったのを見届けてから視線を私に戻し問いかける。

直ぐ傍の馬車へ向かうニレスさんにヘルートがついていった。お嬢様も大変だな。

しかし、どこからか……か。別に好き好んで来たわけではないのだが。

さて、どう言って説明しようか？

10 私、ガーター派なんです。

アナタ達の知らない世界から、とでも言えばせつかく歩み寄ってくれそんな雰囲気万台無しにしそんな気もする。

「大陸を越えた極東の島からです」

かなり端折った上に勘違いを狙った回答だが、今はこれで良いだろう。いずれ機会が巡ったときに訂正すれば良いわけだし、嘘も方便である。

「そんな遠くから……どうりで、タテシナ殿は色々……習慣が異なるように」

暗に物を知らぬと言われている気もするが、笑顔で誤魔化しておく。

「先ほど、両手を挙げたときも皆様驚かれたようで……何せ、大陸の習慣も作法も知らない不調法者なので教えて頂きたいのですが、どういった意味なのでしょう？」

「ああ……タテシナ殿の暮らしていた島では祝術がないのでしょうか」

「祝術という言葉ありませんでした。どういった意味ですか？」
静かにどよめく一行。マーセンさんに代わり、本職らしきローフさんが答えてくれた。

「祝術とは精霊へ捧げる祝詞を詠う、あるいは舞うことを言います。精霊の姿を見ることができ、精霊へ伝える祝詞という言葉、精霊が喜ぶと言われる舞を修得した者が祝術士といえます。祝詞や舞はある程度修練すれば使うことも可能ですが、精霊は万人に見えるものではないので素質が問われるのです」

ちよつとローフさんが得意気のようだ。

ん？ ということは、羽付きヤモリが見えた私も祝術とやらを学習すれば使えるようになるのだろうか。

そう問い掛けるとローフさんは小首を傾げて考える仕草を見せた。

……いや、呼んでないから。

『呼んだ？』とばかりに手首から顔を出してきたヤモリの頭を撫でて引つ込めさせる。

「タテシナ殿へ精霊が移ったこと自体が稀なのですが、契約した精霊は今まで見ることでできなかった第三者にも見えるようになったりもします。タテシナ殿に祝術士としての素質があるか、申し訳ないのですが今直ぐにはお答えできません」

魔法使いっぽいことができたらちよつと私カツコイって思っただけなので、そんなに恐縮してお詫びされるところらが申し訳ない気分になります。

「普通、祝術は祝詞を詠うことで精霊の力を借りるわけですが、流派によっては詠わずに舞によって力を借りる場合もあります。舞による祝術は少数なのですが……」

「つまり、私の動きがその……祝術を行っているように見えたというわけですね」

「お恥ずかしながら……タテシナ殿はご存知ないようですが、毒竜を従える者は本当に珍しいのです。三頭も毒竜がいれば軍力の弱い小国を容易く壊滅することも可能です。それだけタテシナ殿は我々には脅威に見えるということなのです」

この巨体なので暴れたら人間なんぞはブチツとあの世行きだろうが、お馬鹿な秋火を見ているとそんな凄い存在なのだとは想像しづらい。自重するよう善処致します。

先ほど、ニレスさんが諫めてくれたときも言ってたが、それだけ凄いワイバーンを後ろに侍らせていたら、祝術とやらをするよりも命令した方が確かに早い。一步踏み出して首を伸ばせば届く距離なだけに。

私にその気があれば簡単なのに、詠ったり舞ったりと手間をかけて祝術するなんぞ無駄だということか。今更だが納得。

「その、信じられないとは思いますが、私も少々困っている状況で、皆さんとここで会えて助かったと思っています。こちらの習慣

がさっぱり分からないのですが、皆さんに怪我をさせようと思ってるわけではないとご理解頂ければ助かります……」

まあ、お互い様なんだろうけど。なにせ、さっき逃げていった連中が山賊だったという確証もないし。彼らの言い分を保証する、私の言い分を保証する第三者がいらないんだから、お互い様子見しながら距離を測るしかないわけだ。

無駄に彼らの神経を逆撫でないよう気を付けよう。

そんなやり取りをしていると、ニレスさんが馬車から顔を出して手招いてきた。

譲ってくれる洋服が揃ったようである。馬車へ向かうには連中を割って通り過ぎないといけないのだが、手刀を切ったらまた構えられるかもしれないのでヘコヘコ頭を下げつつ歩き出す。

「そこで待ってて」

一緒に付いてこようとすする飛燕の鼻先を押さえ、内心ビクビクとしながら馬車の中に入った。

馬車に乗るのも初めてなのだが、イメージしていた物とはちょっと変わった作りになっていた。

幌のついた荷馬車ではなく、人が乗るための天蓋付きな箱馬車なのだが、側面にあるドアより後ろが長い。

見張りのようにヘルメットがドアの傍で仁王立ちをし、ニレスさんが馬車の中から差し出してくれた手を借りてお邪魔した。

中に入ると座席は前後で向かい合わせるのではなく、電車のように側面にあり、扉より後ろ側には荷物が置かれていた。

子供なら楽に入れそうな横長なトランクボックスが三段重ねられ、一番上にある箱の蓋が開けられている。

グララド王とやらに献上する荷物はこの箱ごとなのだろうか。私が両腕を目一杯広げて端を掴める大きさなのだが、ワイバーンにどうやって持たせれば良いだろうか。背中に積ませるか？ 足で掴ませる方が楽か？

そんな算段をつけている私にニレスさんが声をかけてきた。

「こちらの衣服にお着替えください」

そう言っただけで差し出された衣服ののだが、折り畳まれているとはいえ、ちよつとした高さがある。

礼を言っただけで受け取った衣服をいったん座席に置き、断りを入れてから背負ったままの鞆をそろそろと下ろした。さすがに私も学習したわけである。

「では、着替えが済むまで外でお待ちしておりますので」

「ま、待つてください!」

ニレスさんが外へ出ようとするのを、クロークの裾を掴んで慌てて引き留めた。にわか学習なので成果が追い付いていないが、渡された衣服の量が多いのだ。

動きを止められたニレスさんが驚いた表情で振り返ったので、更に慌てて裾を掴んでいた手を離す。

「着方が分からないので教えて下さい!」

「は?」

戸惑った声を漏らしたニレスさんだが、私の服装を見て納得したのか小さく頷いた。

重ねられた衣服を順に並べると八枚になった。

動きやすいようにとお願ひしたので、一つは布の厚さからもズボンなのだと分かる。

裾の短い物は股引的ももひきなアンダーなのだろうか。二枚もあるが重ね着か?

一枚は皮のケープだから分かるが、残り四枚が悩む。多分、上に着る物だとは思っているのだが、丈の短い物ほどインナーで良いと思って構わないだろうか?

「取り合えず、着る順番を教えてくださいませんか?」

ジャケットを脱ぎ、シャツのボタンを外しながらニレスさんに問いかけたが返事がない。

訝しく思っただけでニレスさんを見れば、視線を反らせていた。少し目が泳いでいる感じもするが、恥入る美人もなかなか乙である。

「ニレスさん？」

既にシャツも脱いでしまい、スカートはそのままだが上はキャミとブラのみだ。安売りではないそこそこ高い上下揃いの下着である。見せる相手は未だいない私であるが、下着を集めるのが趣味なのだ。ほかに金の掛かる趣味はなく、もっぱら投資先は下着である。ちなみに、私はガーター派だ。ガーターこそ至高だ。異論があるなら作文用紙五枚に綴って提出して欲しい。

別にニレスさんも一緒に脱いで、下着についてガールズトークをしましょうよ！ と今はさすがに言う気もないが、美人にそう恥入られると自分がガサツ過ぎるのかと恥ずかしくなってしまう。ためらいなく脱ぐけどな！

しかし、女同士だからと豪快に脱いだのがいけなかったか？ イスラム圏よりも戒律が厳しいのだろうか。またもや失敗か？ やることなすことタブーに触れていい加減くたびれてくる。

相変わらずニレスさんは私からさり気なく視線を反らしたままだったが、着る服を一つずつ手渡してくれた。

「失礼しました。まずは、こちらから羽織ってください。紐がありますので、解けない程度に結びます。次は、こちらを」

一番下に着るインナーはブラの役割なのか、基本は薄い生地だが胸の膨らみ部分は布が重ねられていて少し厚く、着物のように前を合わせて胸の下を紐で結ぶ。

次に言われたのが腰丈の薄いシャツでこれは被る。素材はどれも綿っぽい。次は股引だ。

遠慮なくスカートを脱いだら思いっきり顔を背けられてしまった。今日のパンツは可愛いのだが見てもらえなくて残念だ。キャミは白のレース仕様だが、ブラ、パンツ、ガーターの三点セットで、桜色の生地に黒の刺繍と無駄にやる気溢れたエロ可愛い路線なのに。いつでも勝負へ挑めるのにつ！ 挑む相手がいないけどっ！

気を取り直して股引を穿く。スロースと言えはいいのだろうか。これも生地が薄く太股程度の長さだ。更にもう一枚、膝丈の股引。

そして生地の厚いズボン。全てウエストが余る作りになっているので、通されている紐を結んで落ちないようにするのが基本らしい。インナーといいアンダーといい数枚重ねなければならぬとは、こちらの女性は大変そうである。

次は厚手のボタン付きシャツ、ウールシャツのような手触りだ。そして毛糸でざっくりと編まれたチュニックを被り、皮のフード付きケープを羽織ってようやく着替えが済んだ。クロークは丈が長すぎるので却下となっただけらしい。ついでに靴のサイズも合わないのでパンプスのままである。

正直、モコモコしすぎてモツサリ感が半端ない。しかし、先ほど飛燕に乗っていたときの寒さを思えば妥当なところだろうか。

「お手数おかけしました。ありがとうございます」
着替えを手伝ってもらったニレスさんに礼を告げると、呆れ混じりというかしみじみとした様子でニレスさんが教えてくれた。

「タテシナ殿はよほど良い環境で育ったんですね。この辺りでは伴侶以外の男性に女性が肌を見せることを良しとしておりません。先ほどのように足を見せた衣服ですと、無用な災いと呼ぶこととなりますので気をつけた方がよろしいでしょう」

「はあ……すみません」

私にとっては不可抗力だったのだが、ニレスさんが心配してくれるの苦言なので大人しく頷く。

「以後気を付けます。こちらでは、女性の前でも着替えは控えるべきなんですか？」

郷に入れば郷に従えというし、そういう風習なら知っておくべきかと思つて問いかけてみると、一瞬呆けた様子のニレスさんだったが素っ気なく背を向けられてしまった。

「……ええ、そうです」

何だろつ。その微妙な間は。美人に冷たくされるのは寂しいのだが。

肩を落としてつつもニレスさんに続いて鞆を手に馬車を出る。入れ

替わりにマーセンさんとワロールさんが馬車の中へ入っていった。献上する商品を運び出すのだろう。

さつきも思ったが、トランクボックスをワイバーンへどうやって括り付けるのかと、ついでにニレスさんへ問いかけてみる。

「箱は全てここに捨てていきます。グララド王へ献上する品は重ばりませんので大丈夫ですよ」

さつきの素っ気なさが嘘のような笑顔で答えてくれた。

不法投棄と思わなくもないが、馬車を運ぶわけにもいかないし致し方ないのだろうが、豪華さはないがしっかりと作りの馬車なので勿体ないと思う。

私と歳がそう変わらないように見えるニレスさんだが、一瞬機嫌が悪くなったりする様子から、私が想像しているより実際にはもう少し若くて気分にもうらみが出てしまうのかもしれない。アングロサクソン系は老けて見えるというし。

ここは大人の余裕で流しておこう。

しかし、実際には幾つなんだろうか。

クエリさんは肌が黄色人種っぽいからそう外れなさそうだ。目が細いので冷めた雰囲気だが、見た感じ二十五から三十といった感じがする。

マーセンさんは脂の乗った四十代前半で、ワロールさんは寡黙で渋さが滲んでるように見えるから三十代後半。

ヘルトには思うところがあるので精神的に未熟さが残る三十代前半。若造と言いたいところだが、二十代というにはちょっと顔が老けて見える。

目が大きいリラバさんは一見二十代前半そうだが落ちついた雰囲気からして二十代後半、ローフさんも落ち着いているから二十代後半ってところだろうか。

ニレスさんも見た目に比べて落ち着いているけど、他の連中に比べれば若く見えるので二十代前半、と思わせて実は十代後半という説も捨てがたい。

などと一人勝手に予想している私へ、ニレスさんと入れ替わりに近寄ってきたリラバさんが人懐っこい笑顔で夕食らしいものを分けてくれた。

とつても肉厚でカツチカチなジャーキーである。釘が打てそうだし、イジメではないよ……ね？ その甘い笑顔でイジメているわけではないよね？

11 私、餌付けされるのは嫌いじゃないんです。

着替えが済んで馬車を出ると、ワイバーン達がその場でステイを続けながら必死に尻尾を左右に振っていた。鬱陶しいと思うときもあるが、こつも懐かれればやはり可愛いと思えてしまう。半ば絆され大人しくステイができたことを誉めるために飛燕の傍へ戻った。ついでに、鼻を寄せてきた秋火と屠竜を撫でてやる。なぜかリラバさんも一緒にしてくれる。

リラバさんがくれた堅いジャーキーは保存食でいざというときはそのまま齧るらしい。いざじゃないときは鍋などに入れて調味料として、また具材の一つとして使うのだそうだ。

ちよつと舐めたらかなりしょっぱく、顔をしかめた私を見てリラバさんが笑っていた。いきなり剣を抜いたどこかの誰かとは大違いで好い人である。

一応ワイバーン達を警戒しているようだが、私の傍でのんびりと話しかけてくる。用意が揃うまで仲間と雑談に興じているような雰囲気だ。現に、私と離れたニレスさんとヘルート、クエリさんも程よく肩の力が抜けた感じで話し合っているようだ。

リラバさんは目がクリツとして連中の中では童顔に見えるが、甘いマスクに絶やさぬ笑顔が好印象を抱かせる男性である。モテンだろつなあ。上背もあるし重ね着している服からは分からないが、護衛をするくらいなのだからしつかりとした筋肉がついてそうだし。じつと見上げていたらジャーキーとは別に、腰にぶら下げた袋から丸いプチパンみたいな物を一つ取り出して渡してくれた。

別にギブミーチョコのつもりはなかったのだが、『不衛生』という言葉が一瞬浮かぶもその辺は気持ちに蓋をしてありがたく頂戴する。

そして、相変わらず人間の男には特技が発揮されない事実にも蓋をしておく。コンチクシヨウめっ！

貰ったはいいがこれまたフランスパンより硬そう。聞けば形は異なるが主食となるパンらしい。このまま食べるもよし、スライスしてサンドするもよし、硬いから水分に浸して食べるもよし。

まずは二つに割ろうと苦勞している私を見かねて、リラバさんが「どこのお嬢様かい」と苦笑しながら二つに割ってくれた。

すみませんね。お嬢様つてわけではないんですが、ここの生活からしたらお姫様と言われても通りそう。

中も既に水分が飛んでパサついているので、口に含んで柔らかくなったところからかじって咀嚼をする。

物を食べながらと行儀は悪いが、合間もぼつぼつとリラバさんとお話をした。

家族構成、育った環境、なぜここにいるのか、どうやって来たのかなどなど。答えられる内容についてはよどみなく答えたが、なぜここにいるとか、どうやって来たとか、自分でも分からないことについて言いよどむと、なにやら勝手に誤解して同情の眼差しを向けてくれる。再度じつとその目を見つめ返してみるが何も変化はないね！

ワイバーン達みたいにコロツといってくれば楽かと思ったんだが。

……別に悔し紛れの言い訳なんかじゃないから！

「タテシナ殿はまだ幼く見えるのに、随分としっかりして見えるな。幾つなんだい？」

こちらの一年が何日あって、一日何時間なのかは知らないが日本時間でなら二十四である。そう告げたとき、リラバさんは目を見開き驚きの表情を浮かべた。

以前、アメリカへ旅行した際、バーでアルコールを注文したときにパスポートを見せると言ったバーテンと近くに座っていた外国人の表情を思い出す。英語が達者なら幾つに見えてたのか聞いてみたかったと、返す返す惜しいと思っていたがその機会に恵まれたようだ。

「いくつに見えますか？」

「十五、六かと思つてたんだが……驚いたな」

さすがにそれは、と思わなくはないが予想よりも幼く見られた。

しかし若く見えるのは肌のせいか、呑気そうな雰囲気のせいか、素直に喜べるかどうかはそこで大きく違つてくるものだ。

若く見られるのは嬉しくあるが、子供過ぎるのも微妙なところではある。が、やはり頬が緩む程度には嬉しかったりもする。女心は常に移ろいやすく複雑なものなのだ。

「私達は全体的に幼く見えるみたいですね。リラバさんも若く見えますけど、幾つなんですか？」

「二十八だ」

おや、優良物件。

「クエリさんは？」

「クエリ？ クエリは二十六だつたかな？」

二人とも予想していた歳とそう離れてはいないようだ。

同じ黄色人種風でもクエリさんは歳相応に見えて、私が幼く見えるのは育つた環境のせいかもしれない。

何せ彼らは命をかけた仕事をしていて、私は平和ボケと言われる日本で育っているわけだし。老け込み方も違つだろう。

ついでに他の人の年齢も聞いてみた。

マーセンさんは四十三歳、ワロールさんは三十七歳でそろそろ現役引退を考えているとか。この手の職種の現役寿命は思つていたより短く四十歳辺りで退くのだそうだ。四十歳なんてまだまだ働き盛りと思うのだが、いくら鍛えていてもやはり若手の俊敏さに適わない瞬間が出てくるとかで、少しずつ現場の仕事を減らしながら若手の教育に回るのが通常らしい。

もちろん、若手の俊敏さも大事だがやり手の老獪さも大事なので、仕事に応じて現場に出たりもするのだそうだ。

ヘルトは二十九歳、ローフさんは二十四歳、そしてニレスさんはなんと十九歳だと！ どうりで水を弾きそうな瑞々しい肌をして

いるわけだ！ 若さめっ！

そんな風に思いながら、ニレスさんと張り合うつもりはないが、ことなく勝負にもならなかった気分でリラバさんからそっと視線を逸らすと、荷物の仕分けが済んだマーセンさんとワロールさんが麻袋を手に馬車から出てきた。

私も貸してもらったリュックサクサイズの麻袋を、マーセンさんとワロールさんがそれぞれ一つずつ持っている。

案外、荷物が少なく思えたけど、さっきニレスさんが重ばらないとも言っていたしこんなもんかと納得したのはよいが、今度は誰がワイバーンに乗るかで少し揉めてしまった。

三頭のワイバーンに乗る人間は八人だ。

二頭は三人、一頭は二人となるのだが、命令を聞くか聞かないかは別として私が一番前に乗るのは確定らしい。となると、背中を誰かに預けることとなるのだが正直ヘルトは嫌である。

ご飯をくれたリラバさんなら良いかもと思わなくないが、初対面の肉体派男性と至近距離というのは居心地が悪い。日常にいる男性陣が空気というわけではないのだが、彼らが醸し出すなんとも表現しようがない雰囲気は、平穏な日常とは馴染みがないので近すぎると戸惑うのである。

まあ、私が口出すことではないので、彼らの相談が終わるのを遠くから見ているわけだ。

結果として、ニレスさんが押し切る流れで纏まったようである。

騎調士ではないが素質のあるマーセンさんが大人しめな屠竜を扱い、ワロールさんが一緒に乗るらしい。

そして、同じく騎調士の素質があるリラバさんが秋火を扱い、ロフさんとクエリさんが一緒に乗ると。

飛燕には私、ニレスさん、ヘルトとなった。ちえ。

ワイバーンに乗ればどうしても風圧を受けることになるのだが、なんとニレスさんは風の祝術士なのとか。

それぞれに風に加護を与える祝術を詠ってくれたのだが、その祝

術が少し期待はずれだった、というのも失礼であるが。

聞いている方が恥ずかしい派手な呪文でも唱えるのかと思ったら、ほとんど黙読に近く唇を微かに動かしてブツブツと呟いて終わってしまった。

ニレスさんが伏せがちだった目を上げると、一瞬暖かな風が柔らかく吹き上がる。これで風に加護を受けたことになるらしい。

ローフさんはできないのだろうかかと視線を向けると、雷が主流で攻撃特化型なのだそうだ。草食系男子に見えるのに意外だ。

みんな問題なく風に加護も受けたので、私は屠竜と秋火それぞれへ騎乗している人間を落とさないようにと念を押しておく。

「グララドまで一緒に行くことになったから。マーセンさんの言うことをちゃんと聞くんだよ？ マーセンさんがこの人。分かるよね？ 落とさないように気を付けてね？」

『あーい』

と間延びした調子で返事をする屠竜の鼻面を撫でてやり、次いで秋火にも言い聞かせる。

『俺の凄いとこ、見せ』

「見せなくていいから。リラバさんの言うことをちゃんと聞いてね？ 落とさないように気を付ける。分かる？」

『凄いとこ』

「グララド着いたあとにね。分かった？」

『凄い』

「……………」

『分かったの！』

ちよつと睨んだら素直に返事をしたので良しとする。突拍子もないことをしかす秋火だけに、若干不安は残るが扱うのは護衛組だし何とかしてくれると期待しよう。

『今回だけなんだからな！ 仕方なくなんだからな！ 俺は誇り高きワイバー』

「秋火」

『乗ってもいいわよ？』

リラバさんを始め、ワロールさん、クリエさんが乗るときに秋火が凄んでいたので窘めると途端に鳴き声の調子が変わった。先が思いやられそうで不安である。

「グララドまでよろしくね」

最後に飛燕の鼻面を撫でてお願いする。不満はあるのだろうが、大人しく言うことは聞いてくれるようだ。ゆっくりと臉を伏せて応えてくれた飛燕をもう一度撫でてお尻へ向かう。

「タテシナ殿、どちらへ？」

一人あらぬ方へ向かった私を不思議に思ったニレスさんが問いかけてきた。

皆は格好良くヒョイヒョイとワイバーンの太腿を足掛かりにし、ロッククライミングの要領で乗っていったが私にはそんな芸当はできない。服はズボンに着替えられたが、靴は相変わらずパンプスのままなので滑るのだ。

高さのある鼻から乗るより尻尾からの方が乗りやすいと思い、飛燕の尻尾を踏みつけへっぴり腰で乗り上がる私にヘルートが顔をひきつらせている。飛燕の体の大きさを思えば、私が尻尾に乗ったところでたいして重みを感じないと思うのだが。

「こつちから乗る方が楽なので……何か問題ありますか？」

「いえ……その……毒竜と呼ばれる由縁がその尾でして。尾の部分は色が異なっておりますよね」

そうですね。飛燕は黒いボディに尻尾の部分が赤いマールブルになっていますね。秋火は黒いマールブルで、屠竜は紫のマールブルですね。

「獲物や敵を襲うとき、棘のある部分までその色に染まり、尖らせた棘で攻撃するのです。毒竜は竜種の中でも一番の猛毒を持っているんです」

ニレスさんが説明してくれたが、もう踏んでしまったあとなんだけど。取り合えずまだピンピンしてませんが……。

『乗らないの？』と飛燕が不思議そうに見つめてくる。

「と、取り合えず、タテシナ殿に害を成そうという気はないようですが、尾の部分の棘が立って色が変わったときは毒があると、覚えておかれれば良いと思いますよ？」

「はあ……」

もつと早く教えて欲しかった。だからみんなワイバーンの足を使つて乗っていたのか。

釈然としないながらも飛燕の背に乗り、ついでニレスさんとヘルートも乗り上がった。

私の後ろはニレスさんである。ヘルートと相乗りはちょっと嫌であるが、間に美人が入っているので我慢してあげよう。

みんなの準備も整ったようだし、グララドへ向けて出発だ。

方向なんて私を知るはずもないので飛燕にお任せである。

まずは飛燕から大きな翼を広げ、ゆっくりと羽ばたく。体を沈め、折った太い足で地を蹴った。

一瞬の浮遊感、そして更に力強く羽ばたきを繰り返す徐々に高度を上げていく。

木々を越えて翼はいつそう力強さを増して羽ばたく。

下を見下ろせば続いて秋火も地を蹴り、屠竜がゆっくりと羽ばたいていた。

視線を前に向ければ暗がり広がっている。

二つの月が照らす大地はなお暗く陰の形も曖昧で、不夜城と言われる東京の夜とは大違いだ。

繁華街から外れていても昨日まではどこかしらに灯りがある夜だった。マンションの廊下を照らす灯り、道路に設けられた外灯、車のヘッドライト、信号の灯り、コンビニの灯り、そんな物が一つもない世界。

一抹の寂しさと不安を感じながら、私たちは一路グララドへと向かったのである。

12 私、口先だけなんです。

闇、闇、闇である。

月が二つもあるので、背後にいるニレスさんやヘルートの顔を見ることが出来る。

右には秋火、左には屠竜が並び飛んでいるが、飛燕は一回り大きいこともあって互いに羽を広げると十数メートルは優に離れている。そのため騎乗者の顔まではっきりとは見えない。

視線を転じて景色になると覚束なくなる。

下を見れば、森だか林らしき木々が並び、平野だか草原、畑か何か、そしてまたもや木々が続く。

途中、ぼつりぼつりと小さな村と思わしき集落も過ぎたが、灯りを落としていることもあり、気を付けていないと暗さで見落としてしまうほど小さく、たちまち通り過ぎてしまうので飛燕たちの速度が案外早いということにも気付く。

前と左右を見ても目を引く高層な建物も灯りもなく、目を眇めてみたが地平線と大地の境はとても曖昧で、目立った凹凸は見あたらない。

ローフさんが数刻で着くと言っていた街とやらは既に通り過ぎている。

通過してきた村に比べればそこそこ大きな街だったようだが、数点の灯りが燈っているだけで逆に寂寥感が募ったような気分になった。

体感的に三十分は過ぎてると思うのだが、つまるところ退屈なのである。

ニレスさんと世間話をしようにも最近のドラマなどで会話が弾むはずもなく、ニレスさんの後ろにいるヘルートの空気読め的な眼差しもあって後ろを振り返る気にもならない。

ニレスさんがかけてくれた風に加護とやらのお陰もあり、寒くは

ないしドライアイになる心配もなくありがたいのだが、つまるところ眠くなるのである。

先ほど殺されそうになったとか、そんなことは重々承知であるのだが、緊張感を維持しなければと思う傍から船を漕いでいるのだ。

幾度目か頭が落ちたとき、ハツと顔を上げて慌てて口元を拭う。これを何度も繰り返しているのだが、背中がほんのりと暖かい。

不思議に思い振り返れば、ニレスさんの胸にすっぽりと背を預けて寝ていたらしい。美しい顔かんばせが直ぐ目の前に！ 涎の痕とか無いことを祈る！ 化粧を落としてないが大丈夫か私の顔よ！

慌てて背を正した私にクスリと笑いを漏らすニレスさん。美人は失笑も美しい。笑われてるのは私だが。垣間見えた後ろのヘルートはあからさまに呆れ混じりの眼差しだった。ヘルートが言いたそうなことは大体見当付くが、眠くなるものは眠くなるんだから仕方ないではないか。というか、ニレスさん案外胸が硬かった。硬さに痛みを覚えたというわけではないが、服の下に皮の胸当てでもつけてるのだろうか。

「すみません」

「別に構いませんよ。昼ならまだしも、代わり映えない景色では眠くもなりませんよ。普通は既に寝入っている時刻ですしね」

宵つ張りなので普段でしたらまだ起きている時間だったりします。とはもちろん言わないが。

「この森を越えて平地が見えたらいったん休憩を入れましょうか。毒竜を携えているのでうつかり忘れがちですが、アナタは騎調士ではありませんし、長い時間を飛行し続けているのも大変でしょう」
ある意味、膀胱が大変になりそうですが、まだ何とかかなりそうです。

平地に下りたら花を摘める場所があれば嬉しいのだが。お花摘みとか、自然が呼んでいるからとか、雪隠がとか通じるだろうか。トイレは通じなさそうだし、どう切り出そうかなどと思っていたら、ヘルートが厳しい声でニレスさんへ囁いた。

「ニレス様、翼魚よくぎよが追ってきております」

三人が割と至近距離にいるのと、風圧を感じない加護のお蔭か普通より小さな声でも聞こえてくる。

今まで寝入っていた体の温かさと寝起きということもあってちょっとぼんやりしていたが、ヘルートの囁きでパツと浮かんだ漢字は飛ぶ魚。飛ぶ魚と言ったら当然トビウオである。小さな堅いパンを一つ食べたきりなのでお腹が空いているのだ。塩焼きでトビウオ食べたい。

ニレスさんが背後を振り返ったのは至近距離なだけに直ぐに分かった。

空にいるトビウオ、そんな思いで振り返った私の期待は裏切られたわけだが、誰に文句をつければいいのだろうか。ヘルートか。ヘルートにだな。八つ当たり対象はヘルートにしよう。

まだ距離はありそうだが、月明かりに浮かぶ陰は大きい。

一瞬、鳶かと思った。翼を広げたシルエットが鳥に見えたのだ。ただし、鳶にしては大きさが異様だと直ぐに思いなおす。

翼魚という鳥の背に人が乗っているのが見えた。人と鳥との対比からして、翼魚とやらは人間を一人乗せられる大きさのようである。三人も乗せられるワイバーンに比べれば小さいのだろうが、私の知る鳥の範疇を越えている。ワイバーンとか祝術士という存在からして既に私の常識を覆されているわけだが、初心者なので小出しにして欲しい。

一、二、と目に入るシルエットは十羽、それらが追いつけ追い越せの勢いで近づいてきているのだ。

渡り鳥のようにV字の編隊を組んで見えるので見落としがあるかもしれない。

後ろのニレスさんとヘルートの様子が緊張していることもあり、不穏な雰囲気だと否が応でも感じてしまう。

「やつらも大概しつこい」

ニレスさんが低く零す。

「あの……あれは？」

厳しい眼差しで背後を振り返っていたニレスさんが私の問いに向き直る。

「……空賊です」

ヘルートが息を飲んだように思えたのでそちらを見るが、背後を向いたままで表情が伺えない。

「空賊、ですか？」

「空賊です」

キツパリと告げるニレスさんに押し切られているような気もするが、山賊もいたことだし、こうして空を飛べるペットもいれば空賊がいてもおかしくはないような気がする。

一晩で二度も強盗に合う確率には首を傾げてしまいが、そんなに物騒な世界なのか。本当に、この先どうしたらいいのだろう。先を心配する前に、現状をどうにかしないとではあるのだが。

ニレスさんは再び背後を振り返りヘルートに聞く。

「あれだけの翼魚だ。騎調士もいるだろう」

「毒竜の翼に翼魚が追い付くというのも怪しいです。風の祝術士がいると思って間違いないでしょう」

「何人いると思う」

「騎調士一人、風の祝術士が二人……いえ、三人。他の祝術士が四人に弓士二人かと」

「妥当な編成だな」

打てば響くようなやり取りに口を挟む余裕も雰囲気もない。

秋火と屠竜の方はと見れば、騎乗している連中も既に気づいているようで背後を気にしていた。

改めて肩越しに振り返ると厳しい表情で考え込んでいるニレスさんの横顔がある。

「……タテシナ殿」

「はいっ」

何かを決断したようにニレスさんが顔を上げた。

「毒竜をお借りしたい」

お貸しするのは構わないがどうすればいいのだろうか。

「まず、一頭をぶつけもう一頭を援護へ回させます」

ぶつけるって、乗っている人は大丈夫なのだろうか。鞍も手綱もないのに？

戸惑う私にニレスさんが微かに笑みを返してきた。

「大丈夫です。彼らはこういうときの為に鍛えられておりますし、ちよつとやそつとでは振り落とされたりはしません。それに風の加護がありますので、万が一落ちても死ぬことはありませんから大丈夫です。まあ、風に加護はあちらも受けてるでしょうから落ちても死ぬことはないでしょう」

最後、忌々しそうな呟きだったが聞かなかつたことにしよう。

「翼魚は本来そう賢くはありません。寧ろ獰猛で本能の部分が強いのですが、毒竜を襲うほどではないのです。騎調士を失えば統率は崩れ逃げ出すでしょう。騎調士を早く落とせば楽ですが毒竜をぶつけようとすれば祝術士が間違いなく邪魔してきますので、もう一頭で援護もしくは攪乱を狙います。また向こうの祝術士にはローフが対抗します」

分かるような分からないような。取り合えず、ぎこちなく頷く。

「えっと、飛燕は参加しなくても大丈夫ですか？」

数では空賊の方が上回っている。秋火と屠竜だけで間に合うのだろうか。いくら毒竜が強いか凄いと叫んでもできたら怪我をして欲しくはない。もちろん、騎乗しているみんなが誰一人欠けないでいて欲しいというのも本心だ。

私の問いにニレスさんが困ったような笑みを浮かべ、不意に私の片手を取った。何をやる！美人にそんなことをされたら、こ、心の準備が！

「綺麗な手をしている。労働を知らない手ですよ。このような荒事は不慣れなのではないですか？」

そつと手を離すニレスさんに、失敬な！ 立派に働いていますか

ら！　と言う気はない。ニレスさんの言う労働が肉体労働の類だとは見当がつく。

しかし、そういうニレスさんは結構手が荒れてるのだなと。肌触りが硬いと思った。節くれだっているし、指も長いですね。本当にお嬢様なのか？　と喉元を見るがクロークをしっかりと羽織っているので判断しかねる。

実戦経験もあるのだろうか。物騒な場所だからニレスさんに限らず、こちらのご令嬢は武術の一つや二つは嗜んだりするのだろうか。実際、ニレスさんは祝術士でもあるわけだし。しかし、今はそんなことに気を取られている場合ではない。

「その……争いごととは無縁でしたが……手段があるのに何もせずただ襲われるだけなのも嫌ですし。飛燕たちが本気になれば逃げ切れるというわけでもないんですね？」

手の荒れ具合を見て胡散臭かろうが私の環境を思いやれる人だ。

足手まといな私がいるのに、逃げ切れるなら最初から秋火をぶつければと言わないだろう。合気道でもしていれば良かったかもしれないが、武道とは無縁なので私自身は役に立たないけれど、頬を叩かれたら股間を蹴り上げるぐらいはしたいぞ？　実際にできるはずもないので本当に気持ちだけだな！

「……いざとなれば覚悟していただけますか？」

「善処します」

善処　なんて便利で良い言葉だろう。言われるとムカつくが、言うだけなら大好きな言葉だ。

ニレスさんが麗しい笑みを浮かべる。

ヘルートが片手を挙げ、ワロールさんとローフさんが手を挙げて応えた。

「秋火！　屠竜！」

風を切る中、距離もあるのに声を張り上げる必要もなく二頭がこちらに顔を向ける。

一つ頼むよワイバーン君たち。

13 私、一度口に入れた物は出したくないんです。

左右の並びだと距離があり過ぎると思ったのか、秋火が右下、左上に屠竜と羽がぶつかりあわない程度に近寄ってくる。

まずはニレスさんが言っていたプランを秋火に理解させなければならぬのだが……普通に語りかけても分かってくれる気がしない。

「秋火。あの後ろの連中を蹴散らして欲しいんだけど……分かる？ ゆつたりと羽ばたきながら秋火が微かに小首を傾げる。興味がないさそうなの、やる気のなさそうな雰囲気だ。」

「秋火の凄いやつところ見たいな」

気怠げに見えた瞼をパツと開き、爛々とやる気が溢れだした眼差しを向けてくる。

ワイバーン、いや秋火も煽てればたやすく木に登ってくれらしい。

「ほら、あの後ろにいるの。翼魚だっけ？ 喧嘩吹っかけにきてるみたいじゃない？ 怖いな。秋火がパパツと蹴散らしてくれたら嬉しいな。アツという間に片付けちゃったりしたら、秋火って凄いな。って思うんだけど？」

「マジ？ 見たい？ 見たい？ 俺の凄いやつところ、見たいの？」

秋火が大きく羽ばたきながら鳴くので、見たい見たいと頷いて返す。武者震いなのか、ザワザワツと尾に生えている棘が一気に立ち上がった。ついでに尾もグルグル回っている。飛びながらそんなに激しく尾を振り回して、バランスを崩さないのだろうかと心配になる。

息を吸い込む胸が大きく膨らみ、何かかと思えば秋火が雄叫びを上げた。

いきなりのことで焦りながらも近場での雄叫びは耳に響く。とっさに両耳を塞ぐと、秋火がまだ吠えているのに音が弱まった。

「大丈夫ですか？ 風に加護を強めたのですが……聞こえますか？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

「どうやらニレスさんが風の祝術とかで音量調節してくれたらしい。便利だ。」

「気を取り直し、でね……と話を続けようと秋火を見れば、驚愕と
いった表情で目を見開いている。同時に、左側からマーセンさんの
微かな悲鳴が聞こえた。」

「まだ距離があると思っていたが襲われたのか！ と慌てて左側を
見ると、左上にいたはずの屠竜が高度を下げた旋回し、翼魚に向か
い羽ばたいていくところだった。」

『凄いとこを見せるのー』

「のんびりと一鳴きする屠竜、それを聞きつけて騒ぎ出す秋火がバ
サバサと慌しく羽ばたく。」

『ばか、バカ、馬鹿ーっ！ 凄いとこ見せるの、俺なのーっ！』

「待つ！」

「待てと制する間もなく身体を僅かに傾けて離れた秋火が、急旋回
して屠竜に負けじと速度を上げて追いかけていった。」

「飛燕に乗る私とニレスさんとヘルートが声もなく二頭を見送る。」

「開いた口が塞がらないというか……お前等揃って馬鹿だーっ！ 人
の話を聞けーっ！」

「そんな胸中を察したのか、慰めるようにニレスさんが控えめに声
を掛けてくれた。」

「結果良ければと言いますし……その、タテシナ殿は騎調士ではあ
りませんし……ね？」

「いつそのこと、何も無かったように振舞って欲しい。激しく肩身
が狭い。」

「私のせいではないが、私のせいとしか言い様がないこの気まずさ！
しかし、そう自分のことに感^{かま}じている場合ではなかった。」

「散ります」

「ヘルートの低い声に背後を振り返る。」

「真正面から突っ込む屠竜に翼魚の編隊がばらけた。件の祝術士た^{くだん}

ちが繰り出す祝術に、闇の中を赤い炎が屠竜へ向かって走るのが見える。

透かさずローフさんの祝術である雷が轟き炎を散らす、風の祝術が繰り出されたのか秋火の身体が大きく反り返った。端から見れば、あら綺麗な花火とも思えた。ところが、そんな悠長に見学している気分ではない。

体勢を崩す秋火に一瞬ヒヤリとしたが、怒った様子で咆哮を上げているのが聞こえホッと胸を撫で下ろす。

屠竜や秋火に比べ小柄な翼魚は小回りが利くのか、腹立たしく感じるほど二頭を翻弄してくれる。

と、グウと低く喉を鳴らした飛燕の背が大きく波打つ。いや、大きく息を吸い込んだ。

飛燕が口を開けた瞬間、身体の奥底まで響くような、ビリビリと空気を震わせた咆哮を一つ上げて飛燕は力強く羽ばたき高度を上げる。

ニレスさんのお蔭で耳を塞ぐには至らなかったがいきなりなので驚く。ニレスさんも驚いたらしく戸惑いの混じった声で問い掛けてきた。

「タテシナ殿、いったい……何を？」

「いえ、私は何もしてませんっ」

お前もか、ブルータス！ と思ったが、飛燕は高度を上げて方向を転じただけで翼魚へ突っ込んでいく様子はない。

あたかも指揮官のように、直ぐには襲われない距離を維持しながら状況を眺めているという感じだ。

お陰で振り返ったままという辛い姿勢は楽になった。

こうして少し高いところから見下ろすと、鳥と思えた翼魚は尾羽の代わりに金魚の尾を横にしたようなヒラヒラとした物がついている。だから翼魚と呼ばれるのだろうか。

茶色の屠竜に比べ、明るい銅色あかの秋火は月明かりを受けてよく見えた。また、翼魚も金色と見紛う明るい琥珀なので右へ左へと旋回

する様子が分かる。

身体の大きさからジャンボ機とセスナ機の乱戦といった具合で、秋火も屠竜も奮闘してくれているが素人目には状況が厳しく思えた。月光を反射しているのは水の祝術だろうか。牙を剥き出した屠竜が翼魚へ向かうと、数多の滴が鼻先に飛んでくる。遠くからだと散弾銃のようにも見える水の粒は、屠竜の咆哮がシールドになったのか、砕けた飛沫が月光を受けて葉莢のようにキラキラと地に散っていくのが見えた。

一方、秋火は広げた羽に風の祝術を受けて別の翼魚へ近寄ろうとすると身体が大きく傾く。果敢に攻める秋火をまずは落とそうと、連射される砲弾のようにいくつもの火の玉が追いかける。ローフさんも苦戦しているのだろう。雷が何本も走り追尾する火の玉を落としているが、落とすきれない幾つかが秋火へ当たっているように思えた。秋火へのダメージは大きくなさそうだが、鬱陶しさは感じているらしく、時折旋回しながら宙返りで火の玉を避けている。騎乗している人たちが落ちないかハラハラし通した。思わず掌に爪を食い込ませてきつく拳を握り締める。

屠竜が翼魚の間をすり抜け背後に回る動きを見せたと思ったが、急旋回により撓った尾が翼魚の顔を強かに打ち付けた。バランスを崩した翼魚が体勢を立て直そうと羽ばたく姿は藻掻くようにも見え、が、次第に羽ばたきは弱まり、そのまま錐揉み状態で落下してしまった。毒竜と言われる由縁がこれかと納得する。かなり早く毒が回るようだ。

墜落する翼魚に騎乗していた人間は早々に見切りを付けたのか翼魚から離れ、パラシュートもないのにゆっくりと落下していく。ニレスさんが風の加護を受けていると言っていたことを今更だが理解する。しかし、まだ一羽だけだ。いや、二羽になった。

秋火が翼魚の一羽に喰らいついた。後ろから身体半分を咬みつかれた翼魚の上げた悲痛な鳴き声が聞こえてくる。ワイバーンの牙で思い切り咬まれたら一溜まりもないだろう。翼魚に騎乗していた人

間が離れてゆつくりと落下していくのが見えた。おそらく炎の祝術を使っていた人間だ。これで秋火も少しは動きやすくなるかと期待が持てる。

早く騎調士がいなくなれば、そう強く願うもなかなか翼魚は逃げ出す気配がない。

ちよこまかと動き回り秋火を苛立たせていた翼魚へ高度を下げていた屠竜が急上昇の勢いで派手に真下から喰らいつき、翼魚が甲高い鳴き声を上げて羽を散らし藻掻いている。

「……凄い。毒竜がこれほど統率の取れた動きができるとは……」
ヘルートの感嘆する呟きが聞こえた。実際、屠竜と秋火は絶妙な連携で翼魚を追い払い、或いは追いかけて遅々とはあるが着実に数を減らしてくれている。咆哮を上げて怯む翼魚を尾で叩きつけて一羽を落とす。これで四羽が落ちた。

すれ違い、旋回し、入り乱れ、互いがそれぞれに相手を落とそうとする中、二羽が群を離れてこちらへ向かってきた。

飛燕が一声あげて威嚇をするが、翼魚は構わずに近づいてくる。

「タテシナ殿、伏せていてください！」

ニレスさんの声に、飛燕の背へ勢いよく伏せる。

今の私ができることはニレスさんたちの邪魔をしないことである。とはいえ、顔まで伏せて状況が把握できないのも怖い。身体は伏せたままわずかに顔を上げて近寄ってくる翼魚を見る。

他の翼魚に比べ少し大きいのか、騎乗している人間が二人ずつだった。一羽の前に乗る人間は短い弓を構えていたがニレスさんが先手を打つ。吹き付ける強風に煽られ翼魚の身体が傾くも直ぐに体勢を立て直した。こんな空の上で矢を放って届くのかと思わなくもないが、風の祝術とかで風の抵抗をなくしているのかもしれない。何せパラシュートなくても墜落死しないのだから、それぐらいは余裕そうだ。

もう一羽に乗った後ろの人間が腕を開く。杖を持っているからきつと祝術士だ。案の定というか、彼の前に拳大の石がポツポツと現

れる。一つや二つどころではなく、数十個と宙に浮かぶ石。それをどうするかなど聞かずとも分かるだけに顔が引き曇る。

翼魚に乗った祝術士が腕を払うと勢いよく石がこちら目掛けて飛んできた。バツティングセンターで最速設定された球以上のスピードじゃなかるうかつ。ニレスさんもとつさに大きく腕を払うことで風を起こして飛んでくる石を逸らす、その隙を狙ったのか弓士の番え^{つが}た矢が放たれる。しかしそれをヘルートが剣で叩き落す。織り込み済みなのか、次から次へと矢を番えては放たれるのでキリがない。一度はニレスさんが逸らした石も、向こうの祝術士によって再び浮き上がり剛速球で飛んでくる。

飛燕が透かさず身体を傾けて旋回したことで石を避けることはできたが、私の頭の上を矢が飛んでいく。しかも、飛燕が滑降したり急上昇したりするものだから、臓腑に掛かる力が上へ下への大騒ぎな上に目が回りそうである。パンが。リラバさんのくれたパンがあつ！！

覚悟を決める前に気を失いそうです！

他力本願で申し訳ないが誰か早く何とかして下さい！！

14 私、戦争を知らない大人なんです。

飛燕を始め、屠竜と秋火も頑張ってくれてはいるのだが、状況があまり宜しくないように思える。

一つは、騎調士という能力の差が原因なのかもしれない。

私はド素人であちらは優秀そうだ。実際、優秀なのは分らないが、ワイバーンの攻撃を際どくも翼魚が回避し続けているのである。

本来、獰猛ではあるがワイバーンへ進んで襲うことはないという翼魚がこつも果敢に攻めてくるのだから、何かしらの要因があるのだらうと思わざるを得ない。

それが騎調士の能力なんだろうと推測する。

なにせこちらは全てをワイバーンの本能にお任せしお縋りしているわけであり、訓練された翼魚は甘く考えてよい存在ではないと、今更思っているわけである。

しかし、気付いたからといって既に上へ下へ右へ左へとアクロバティックに飛び交う現状で、私が何かできるかと言えば否なのだ。

翼魚へ咬み付こうと飛燕が首を伸ばすと背がうねり、乗っている私の体が浮き上がる。背後に回った翼魚を長い尾で叩こうと腰が捻^{ひね}り、浮いた身体が右へ左へと流される。

必死に身体を伏せて飛燕にしがみついているもののコレである。素人はロデオに挑むものではない。今、強く実感している。特別スポーツをするでもなく、優しく採点をつけるならば二の腕にほんのりと、ほんのりと！ 自前で用意された余肉という名の振袖がついている、そんな柔^{やわ}で一般的な女なのだ。つまり、しがみつく力がまるつきりないのである。

なので、飛ぶ。当然、飛ぶ。とにかく、飛ぶ。左右へ滑りそうになるたび、浮き上がったままどこかへ飛んでいきそうになるたび、背後にいるニレスさんが覆い被さり押さえつけているのだ。

私の手首を掴み、伸ばした腕、背に被さる身体全体で体重をかけて押さえ込んでくれている。

その傍ら、相手の攻撃を交わして風の祝術で応戦している。ヘルトは剣しか持っていないようで、もっぱらニレスさんに飛来してくる石や矢を叩き落としてガードに徹底している。

とは言え、あちらは攻撃に特化しており、こちらと言えば攻撃ができるのはニレスさんのみ。しかも私を庇いながらときている。非常に不利な状況なのだ。

相手も私がただ庇われる足手纏いな存在と気づいたようで、私を集中的に攻め始める。当然、背後にいるニレスさんが私を庇うのだが、その隙を狙ってニレスさんを攻撃するという流れに変え始めた。受け身になりがちな状況では埒が明かないと思ったのか、ニレスさんが攻撃に転じようと上体を起こした途端、相手から飛来してくる石と矢に身体を傾けた飛燕が急旋回にて避ける。

一瞬の出来事だった。

背後からの押さえを無くし、浮いた私の身体が飛燕の旋回で流れる。

あつ！ と思ったときには遅く、しがみつこうと腕を伸ばしたまま私は飛燕の身体から宙へと滑り落ちてしまったのである。

驚愕に目を見開き片腕を伸ばしたニレスさんを見つめ合いながら、距離が開き私は落下していく。

何もかもがゆっくりに見えた。

ヘルトも見張った目で私を一瞬見るがすぐさま相手に視線を戻す。

私に意識を向けているニレスさん目がけて飛来する矢を、飛燕が強く羽ばたくことで叩き落とす。

なぜか、私はニレスさんを見つめ合いながら出会いはで始まるフレーズが脳内を駆けめぐっていた。

スローモーションに感じるこれこそが走馬灯というものが、と余裕をかましていたわけではない。現実逃避である。

しかし、浮いた身体は慣性に従って落下していくが、スピードは乗らずに寧ろ下から風が速度を削いでいるようだ。いや、ようだではなく実際に削がれている。

ニレスさんの言っていた祝術のお陰なのだろう。ならば、墜落死だけは避けられるだろうと心に余裕が持てたそのとき、何を思ったのかニレスさんが飛燕の背から私目がけて飛び下りたのだ！

ゆっくりと落下する私とは異なり、勢いに乗ってニレスさんが近づいてくる。思わずとばかりに伸ばした腕を掴み抱き寄せられた。

服で確証が得られなかったとはいえ、さすがに背から被さる体格や、力強い腕は同じ女性とは思えない。薄々男ではなかるうかと思っていたが今確信を持って男だろうと断言できる。

勢いを付けて落下してきたニレスさんだったが、私を抱えたことでゆっくりとした落下に変わる。

なまじゆっくりなだけに緊張感の薄い私の脳内は、エンダーなフレーズに切り替わった。現実逃避ゆえである。沈没ではなく落下ではあるが。こんなときでも乙女心を忘れない私は自分を自画自賛すべきだろうか。

私を掴まえたニレスさんは安堵の表情を一瞬浮かべ、直ぐに厳しい表情で上空を睨む。釣られて私も上空を見上げる。

飛燕が怒っていた。もう、それは容赦なく。未だ背に乗っているヘルートの身体が激しく上下をしているのが見えた。

寧ろ、ヘルートの存在など無きが如しの暴れようだ。暴れ馬ならぬ暴れワイバーンである。

一羽の翼魚がこちらへ滑降してくる。もう一羽の騎乗者が飛燕の気を引こうと攻撃してくるが、物ともせず飛燕も滑降してくる。

一羽と一頭、特に飛燕の怒りの形相は凄まじく、3Dもかくやといった迫力で近づいてくるのだ。

勢いよく迫ってくる血走った飛燕の目に顔が引き攣り、ニレスさんに思わずしがみついてしまう。いや、思わずの行為であり下心はないと断言しよう。

翼魚に乗る一人が弓を番えたが、大きく口を開けた飛燕が直ぐ真後ろに迫っている。

ニレスさんが咄嗟に私の後頭部を掴み、胸へと押しつけるのと同じ時に悲鳴が聞こえた。翼魚と人間の悲鳴である。

結果として、矢は放たれずに転回して急上昇する飛燕からの風を柔らかく感じただけだった。

危機は去ったのかと思っただが、しかし回されたニレスさんの腕が強ばったのを感じる。更に上空では激しい羽ばたきと人間の悲鳴が聞こえ、怖いもの見たさというか状況を確認かめたいという本能からか、顔を上げようとしたところへとつじよ足下に支えができた。

ゆっくりとした落下から緩やかに浮上する。

しがみついていた腕を緩め、慌てて下を向けば白い地面　いや、白いワイバーンの背に乗っていた。

反射的に顔を上げてみれば、未だ根性でしがみついているヘルートの身体をシェイクさせている飛燕と、蒼いワイバーンが祝術士の乗った翼魚を甚振っている。

旋回し逃げを打つ翼魚の先に蒼のワイバーンが広げた羽で行く手を妨げ、更に転回しようとする翼魚の鼻先へ飛燕が尾を振り払う。態勢を崩しかけた翼魚へ咬みつくかのように蒼の顎が掠り、滑降で避けようとした翼魚の腹へ、飛燕が先に啜えた翼魚で反動をつけて放り投げた。避けようもなく仰け反る翼魚へ蒼が余裕綽々といった様子で棘の立った尾で叩き落とす。乗っていた二人諸共だったように見えたが、ワイバーンたちの助けが無ければ死んでいたのはこちらである。軟弱な私にはショックが強すぎる。全身に震えが走り鳥肌も立っているが見なかったことにしよう。そうしよう。

生唾を飲み込み深く息を吐き出し、自分を律しながらそう言えば屠竜と秋火はどうしたかと視線を転じる。

白と蒼が揃っているのだから緑も来ていると思うのだが。と見てみると、最後となった一羽の翼魚でバレーボールに興じていた。

私のときとは打って変わり、屠竜が啜っては放り投げ、秋火が尾

で叩き上げて緑が更に啞えてワイバーンキックをしている。彼らはどんなときでもフリーダムだった。

逃げる素振りもなく飛ぶ力を失った翼魚は既に事切れているようで、おそらく騎乗していた人間は生死不明だが落下したと思われる。

「タテシナ殿……大丈夫ですか？」

「あ、すみませんっ」

騎乗のための至近距離と、真つ正面から抱きつく至近距離は似て非なるもので、内心慌てながらそつと距離を取った。慌てふためいてワイバーンの背からまたもや落ちるといった目には合いたくはない。お見合い状態にいるのも気恥ずかしさを覚えるのでゆつくりと向きを変える。

「何とか翼魚も追い払えました。タテシナ殿もお辛いでしょうからあの辺りでいったん下りて休憩を取りましょう」

背後からニレスさんが指した所は空から見ると木々がちょうど切れ、六頭のワイバーンが下りても余裕がある草原らしき場所だった。「また襲ってくるとか、大丈夫ですか？」

数時間の間で立て続けに二度も襲われるほどだ。休憩するのは構わないが、また襲われるとか正直勘弁してほしいところである。

「おそらく大丈夫です。あれほどの腕を持つ騎調士はそうおりませんし、騎乗できるほど訓練された翼魚自体が稀です。地を駆ける騎乗種に至っては、軍でいかに訓練を積んだとしても一定の距離以上は毒竜に近づこうとは致しません。仮に体制を整え再度襲ってくることになったとしても時間を要します。彼らが追いつくころには我々は空の上ですから問題ないでしょう」

ニレスさんの言葉を受け、騎乗している白のワイバーンへ地上へ下りるようお願いをする。

二度あることは三度あるともいうし、ニレスさんの言葉を全面的に信用するわけではないが、不慣れな長時間の飛行と、日常とは無縁な生死を賭けた修羅場で心身共に疲労している。休憩が取れるのならばそれに越したことはない。

「飛燕、秋火、屠竜、下りるよー」

てんでばらばらに飛び交っているワイバーンに声をかけると、白のワイバーンがグウと喉を鳴らしてきた。蒼も緑も寄ってくる。なぜか、翼魚を啜えた秋火も寄ってきて得意気に喉を鳴らしていたりする。

『名前貰ったんだぜーっ！ いえーい！』と自慢している風の秋火に、蒼が『何それ、何でお前が名前貰ってるわけ？ 馬鹿の癖に！』と牙を噛み鳴らし、緑が『馬鹿の癖に馬鹿の癖に』と唸り声を鳴らし、秋火が『馬鹿じゃないっ！ あっ！』と反論に口を大きく開けて吼えた途端、当然ながら落ちていく翼魚を慌てて追いかけていった。騎乗していたリラバさんにローフさんとクエリさんの小さな悲鳴が聞こえたような気もする。

屠竜といえば『ごっはーん』と思わしき一鳴きを残し、一頭離れて引き返すように高度を下げていく。騎乗していたマーセンさんとワールさんも無事な様子で何やら叫んでいる気もするが直ぐに戻ってこれるだろう。と願っておく。すみません。フリーダムな彼らを纏め上げるなど、私には到底無理です。

屠竜と秋火に騎乗している連中へは心の内で謝罪を送っておく。飛燕は白に私が乗っていることが気に入らない様子で鼻息荒く、羽がぶつからない距離で右往左往と果ては上へ下へと鬱陶しくしている。ヘルートの引き攣った顔を見て、少しだけ気の毒に思った。けっして、もっとやれなどとは思っていない。

蒼と緑からの『俺にも名前ーっ！』と思わしき咆哮をあげ、白は物憂げな眼差しで見つめてくる。見つめるを通り越してガン見してくる。しかも哀れみを誘う鳴き声つきで。

分かった。分かったから。下りたら君らにも名前を付けるから。頼むから前を見てくれ。振り返ったまま高度を下げないでくれ。

地面、もうそこだから！ 前を向かんかーいっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9924x/>

WyvernCourier

2011年11月29日00時29分発行